第 536 号

音楽の世界

目　次

論壇　言葉と記憶　中島 洋一　2

特集　闇の世界と芸術

意識、この目に見えぬ豊穣なる闇　ロクリアン正岡　4

世を騒がせた大事件と文学　中島 洋一　10

音・雑記ーひなの里通信ー (45) ・・・・・・・・・・・・・・ 狭間 壮　16

名曲喫茶の片隅から (26) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 宮本 英世　18

音 盤 奇 譚 (31) ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 板倉 重雄　20

報告　**日本音楽舞踊会議新年会**　（事務局長）　22

追悼・音楽界

最近逝去された音楽家の方々　編集部　24

追悼・三木稔　今井重幸・落合　良・坂田誠山　25

谷　始・田村拓男・西　耕一

特別寄稿　三木先生との想い出　佐藤 光政　29

林光君のこと、別宮貞雄さんのこと　助川 敏弥　30

信念の人、別宮貞雄さんを偲んで　中島 洋一　33

短期連載

福島日記(6)　小西 徹郎　34

明日の歌を（第六回-2）**今井 重幸 その２**　橘川 琢　36

現代音楽見聞記(11)　西　耕一　40

日本音楽舞踊会議：出版楽譜のご案内 (9) ・・・・　高橋 雅光　41

CMDJ 会と会員の情報　45

論壇　言葉と記憶

作曲　中島 洋一

音楽作品の楽譜を読んだり、演奏を聴いたりしていると、他の作曲家のものとよく似た楽想、旋律に出逢うことがしばしばある。何度も聴いて耳にこびりついていた他人の旋律を、うっかり使ってしまった場合、意図的に他人のものを拝借した場合など、ケースは様々であろう。しかし、他の作曲家のものと似てはいるが、やはりこの作曲家の音楽だと思わせるケースも多い。

例えば、昔から多くの人々に指摘されているブラームスの第１交響曲の例に触れると、第四楽章で序奏の後に弦楽合奏で現れる第一主題の部分、特にレーミファミーレと繰り返される旋律は、ベートーヴェンの第９交響曲の『歓喜の歌』“Deine Zauber binden wieder”の部分と良く似てはいる。しかし、ブラームスの音楽的感性が色濃く表れており、ベートーヴェンの模倣とは言い難い。

また、サンサーンスのヴァイオリン協奏曲第３番終楽章の展開部においてト長調で出現する「レーミーレソミド」の旋律はニ長調に移調すると、ベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲の冒頭の部分を連想させる。しかし、これもやはりベートーヴェンとは異なるサンサーンスの音楽的感性を色濃く反映している。どちらも、尊敬する大作曲家の音楽に何度も接しているうちに、それがその作曲家の魂の深い部分で消化され、作曲者の音楽として生まれ変わり再現された例と言えるのではなかろうか。

言葉についても、心の中で何度も反芻しているうち、記憶の中で変質して行き、もとの言葉が誰のものだったのか定かではなくなったり、気がつかぬうちに、語彙が変質している場合がある。

私は十代の終わりの頃、ゲーテの文学を読んで感動し「人間は努力をすれば迷うものだ」というゲーテの言葉を座右の銘とし、自分自身が迷った時、その言葉を思い起こし、自分を励まして来た。しかし、その言葉の出典が思い出せない。多分『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代／遍歴時代』からのものだったと思うが、あるいは『ファウスト』だったかもしれない。

他に、やはり 19 才の頃、シューマンの 18 才時の手紙（多分母に宛てたものだったと思う）の文中の、「極限の自我と極限の非我は結局同じところに到達するのではないでしょうか」と書かれた個所に強く印象づけられ、やはりドイツの青年は深く真面目に考えるものだと感心し、この言葉も私の記憶に深く刻まれた。

哲学書をまったく読んでいなかった当時の私は、極限の自我＝徹底的に自分自身に忠実であろうとすること、極限の非我＝自分のエゴを捨て去ろうとすること、と自己流に解釈したのだ。それから２年後、夏休み中にロマン・ロランの『ジャンク

リストフ』に夢中になり、一気に読破した。そして、ジャンクリストフの中に、自己にとことん忠実に生きることで自己を超えた人間像を見出し、これはロマン・ロランが長い時間かけて構築した、彼自身の理想的人間像そのものなのだ、と受け止めた。

当時、政治、文学に関心を抱くエリート青年の間では、吉本隆明、サルトルなどが流行っており、私はそういう人達とも、また文学などに関心がない人達ともあまり馴染めなかった。精神的な孤独の中で22～23才の頃、ロシア文学、特にドストエフスキーにのめり込み、いままで自分が積み重ねて来た価値観がすべて御破算にされてしまうような衝撃を覚える。ドストエフスキーの嵐を通過した後は、日本文学はじめ、現代文学への関心も昂り、そういうものを読むようになった。

戦後文学史を紐解くと、終戦直後の時期に『物語戦後文学史』の著者で文芸評論家の本多秋五が「エゴを極限まで推し進めエゴを乗り越える」という発言をしている。戦時中は国難を乗り切るため国民が我欲を捨てて一致団結し倫理的に昂揚した時期であったにもかかわらず、国家は大きな過ちを犯していた。従って文学者だけでなく、当時の知識人や若者達の間に、自分自身を見つめなおし、個の主体性の回復、個の責任の自覚という課題に取り組まなくてはならない、という風潮が生まれたのであろう。本多秋五の言葉に触れ、またシューマンの言葉を思い出した、

それから40年以上経った今日、シューマンのあの手紙の言葉の出典を探すため、古びた蔵書を探してみた。そしてようやくシューマン関係の本の中から、その言葉の出典と思われる『若き日の手紙（堀内明訳）』など、シューマンの手紙を集めた本を探し出し、半世紀ぶりに再読してみた。そこには芸術への強い愛と、母の希望で法律家を選択しなければならないという立ち塞がる現実の壁との葛藤が生き生きと、そして時には鬱陶しく語られており、「よく、これだけ長文の手紙を立て続けに書けるものだ。言葉が心の堰を切って溢れるほど、伝えたいことが多くあるからだろう」と感心した私の若き日の記憶が蘇ってきた。しかし、どうしても前述の言葉を発見できなかった。友達に宛てた手紙の中に一個所「非我（ニヒトイッヒ：Nichtich」という言葉が現れるが、自分の反極という意味で使われており、私が解釈した意味とは違っていた。

あの言葉は、もとの語彙は違ったものだったかもしれないし、ひょっとするとシューマンの言葉ではなかったかも知れない。

それでも、自分の青春の心の原点を形成した言葉の一つとして、いつまでも大切にしたいと思っている。

（なかじま・よういち　本誌編集長）

特集：闇の世界と芸術（１）

意識、この目に見えぬ豊穣なる闇

作曲：ロクリアン正岡

いろいろな闇

昼間、我々は星を見ることはできない。闇ではないか。だが、太陽も見えなくするほどの明るさを持った天体が現われたとしたら太陽すら闇に沈む。これらのことを「明るすぎるが為の闇」という意味で明闇（あかやみ）と呼ぶことにしよう。暗闇の反対だ。

明闇と言えば人間の表情だ。無表情から喜怒哀楽のはっきりした表情に至るまで、表に出たいわば明闇の向こうに沈むものがどれほどあるだろうか。

闇と言えば物影もすぐに連想される。視線を遮る物という物。それは人という相手の心の中にもごろごろしている。いや、自分自身の心の中にもごろごろしている。ことごとしく先入見や固定観念と言わずとも、既知の言葉、情報、知識、諸々の思い、これらが全然なかったら大変だが、それらの為に見えなくされているもっと大事なことがどれほどあることか？

また、透明という。それは、ある遮蔽物の表面に視線がぶつかるまで邪魔する物の無い状態だといえよう。視界良好とも。だが、その空間に何もないのだろうか。透明を装う種々の物が実はあるのかもしれない。隠れているのか、いや、透明と見なす我々の方にこそ非が、咎が、罪があるのではないか。知らず知らずのうちの無視。言い訳の言葉は「想定外」か。

暗闇、明闇、物陰、透闇（とうあん）、、、、別に全部網羅しようとしたわけではないが、ことほど左様にこの世も我々も闇に満ちている。裏を返せば光に満ちている。

闇がなければ光なし。光なければ闇もなし。要は光と闇の差異や鬩ぎ合いあってこそのこの世であり、我々の内面、心や頭なのではないか。

“今”を挟む時間の闇、過去と未来

時間的に考えれば、とにもかくにも今、現在というのが光の差す場であり、過去や未来は土台かつ所詮、闇の領域だ。両者はどうやっても直接に知覚することはできない。心や頭の中にしても同じこと。今の場に持ち出さないことには無理だ。たとえタイムマシーンでどの時代に行けたとしても、そこが今となる、というだけのこと。そのことを音楽ほど如実に示してくれるものはないであろう。音が鳴り響くのも鳴り止むのも常に今でしかなく、過去と未来は常に無音で闇そのものだ。

いま見えている遠くの宇宙の様子は遥か過去のことであり、今現在の遠くの宇宙の様子は知る由もない。不可知である。太陽ですら見えているのは８分以上前の姿にすぎず、月だって。となると、我々はそんな遠くのものとは一緒に居ないような居るような、どっちつかずの状態にある、ということになるのではないか。空間的には全宇宙共通時刻時間としての現在に共存している筈のあらゆる天体も、人間にとっては未来の闇に隠れたままだというほかない。

あるいは、今見えている太陽の姿とか、光に照らされている身の周りのものとの現在同居性が信じられるのみか。いや、それとて怪しいものだ。たしかに、見えている光は今現在のものかもしれない。が、その映像はというと、厳密には物の影にすぎず、過去の姿ではないのか。過去の姿は優しげだ。だからアニメーションが愛され、光よりもゆっくりな音波の齎す音楽が愛好されるのか？

過去の闇に母性的な温もりを求める耳という（目よりも）内気な器官。海、子宮、地中に懐かしさを覚える人の心。　生命の地平、平和の園、お守りの力。

自転車と連れ添い歩む撫子に　時も憩うや大和の心月

（余談だが、サッカーのチーム名が「大和撫子」とは噴飯物だ。だが、慣れれば気にならなくなってしまう。この鈍化作用は人を創造性から大きく遠ざけ、おまけに「撫子」のイメージの変質も招く。要注意！）

されど、男とは未来からの烈風を顔面いっぱいに浴びて生きるものではなかったか？

真夜中を斬り裂き走る若者の　心は宇宙のビッグバン道

音楽の闇をどう使い分けるか

あらゆる音楽は時間の長さを要するものだが、表だった現象としては各瞬間しかない。そこを境目として過去と未来の二つのサイドはどちらも闇の世界だ。

それはもともと人間の意識を廻る機構がそう出来ているからだが、二つの闇の違いはいかばかりか？

音楽は各瞬間に鳴り響きつつ時間進行に従って進むしかない。音楽の場合もその根っこは過去の方にあるように見える。だからだろう。昔から作曲は「重力」を意識してか曲頭を土台に上へと組み上げて行くものとして建築に例えられることが多い。冒頭の主題が大事にされる、提示部が繰り返される、好きな曲は何度も練習するし公演もされる、カラオケでも皆が知っている曲が盛んだし、懐かしの歌謡曲という言い回しさえある。その陰で新しさを身上とする現代音楽のなんというマイナーぶり。

音楽を支えるものは、過去の闇独特の温もりであり、母の体温であり、耳の内気さであり、赤子かご老人か御病人の退行感情であり、記憶力でありそうだ。でなかったらＣＤなどの録音物もただの本番の代用品か音楽博物館の陳列物か、さもなければ警察活動の為の証拠物件等に成り下がるほかないようにも思えて来る。

だが、過去にばかり拘る者は現在が貧しくなるばかりか、何よりも未来を完全に失ってしまう。

一方、未来に関わる者は現在や過去を決して失いはしないのである。

ご来光を仰ぐように、未来から頂戴するということ

過去の思い出に浸りがちなご老人方と違い、若者は未来志向だ。若者は身体性の比重が高い。だから未来からの風を浴びたいとなれば具体的に空間移動をするしかなくなる。

確かに他者の発した声は、この大宇宙内部の同時性を信ずる限り、客観的には過去からのものと言わざるを得ない。発声の時点が受容の時点より前だからである。それこそ太陽の光、星の瞬きと同様だ。だが、受容者の主観からすれば、それは今まさに自分に飛び込んでくる未来発のものだ。「ご来光を仰ぐ」と言い、「聴従」という言葉もある。「未来から侵入して来るものを有難く頂戴する」という気持ちは“受容の魂”ではなかろうか。

こういう話だったら、やはり音楽で考えるのが一番だ。

世界初演の現代音楽を有難く拝聴する。始めの音が聞こえる前から聴き手は未来に耳を澄ませて待つ。鳴り出した後も、興味を持ち続ける限りそれが基本スタンスだ。そうしているうちに意識の中に音・音響・動き・テンポ・リズム・メロディー・ハーモニー、それに現代音楽独特の曰く言い難い要素も加わった“音楽”が生まれ生長して行ったり、はたまた別のものに成り変わったりする。だが、それは音源からそのままのものが飛び込んでくるのではない(物理的には単なる空気の粗密波だ)。だから、音楽など、失礼な話、犬の耳にどう響いていることか。音楽鑑賞などやったこともないような人に現代音楽がどう響いているか、考えただけでもぞっとしてしまう。いずれにしても、各自の内側でしか鳴り響くことの無い音楽は、他者にとっては丸ごと闇、開けようもないブラックボックスだというほかない。

まあ、それはそれとして本人にとってはどうなのか。いうまでもなく、音楽とは表だった現象としては「今、まさに鳴り響くもの」かもしれない。移ろいの一コマ一コマとも。しかし、それでは赤子の音遊び以下だ。一曲の全体とは言わずとも、音楽の実体らしいものすら無いことになってしまう。ある種の音楽で植物の生長が促進されたとか牛の乳の出が良くなったなどといっても、そもそも、音楽を聴く彼女らなどそこに存在しているだろうか。

音楽の全体が、この考察を経て闇に沈んだ。人の内と外のほんの一瞬の音響的接点を除いて。だが、別に音楽家や愛好家でなくとも人間ならば何時でも全曲口ずさめる曲をいくつかお持ちだろう。頭の中に曲の始めから最後まで同時に内蔵されているわけだが、具体的に音にするには何十秒かの時間が必要だ。このように時間を要するものが瞬間に内蔵されているということは実に不思議なことだと言わねばならない。というのも、物理的に言えば人は他の諸物体と同じように車に簡単に壊されうる一瞬一瞬の身体的存在事物に過ぎない。それなのに人間は時間というものを自分の一部を取り外すように外へ出すことができるのだ（科学が躍起になっても、脳の中にＣＤのソフトとハードのワンセットなど見つけ得ないだろう）。そして、それのプロこそが音楽家、わけても作曲家なのであろう。勿論、楽譜に時間はない。そもそも時間なんて目に見えるものではない。それ自体が闇だ。

作曲の真髄は、時間という闇との攻防に生きることか

人間は色々な意味で時間に支配されている。作曲家も例外ではない。しかし作曲の仕事は音よりもまず時間を相手取り支配し返す仕事なのだ。音楽にとって時間は、

そこに音を上乗せすればよい単なるカンバスではない。どのような動きも変化もテンポも載せられる**平均的な時間**―この平板なるノッペラボウ―というものは物理的に抽象されたものだ。物理学は、生命体から生命を取り去ったようなものが物質だ、といった考え方をしているだろう。それはそれで構わないとして、だからといって、生命体は元々ある物質に生命が後から付け加わったもの、というのは不味い（人造人間、アンドロイドはアメーバほどの尊厳も神秘性もない）。音楽も一種の生き物だ。それは平均的時間などという非生命的なものとは無縁なのだ。それらはそれぞれ独特のテンポ（速さ、遅さ）を生きる。ましてや人間は生命以上の生命だ。そこには如何に周波数レンジの広い無限のテンポが内臓されていることか！人間の持つ演技力や演技欲―その程度や能力は人によって様々だが―とは、自分自身に内蔵される様々なテンポを使い回す“上なる自分”のものではないか。いやしくも芸術の場合はそうであるように思われる。

人間一人一人の自分にとっての“上なる自分”という闇

次は、2011 年の賀状の全文である

人間の皆さま、お元気でしょうか？
お互いたまたま人間に生まれ人間をやりそして退いて行くわけですが、人間という役柄よりもそれを演じきる役者の方がより切実なわけであります。
各々方自身にとってすら透明なこの役者こそ“不可知の何様”（≒全一者）の一細胞といえるものでありまして、私の楽曲はその目に見えない「何様」からの信号を可聴体に置き換える為のシステムであります。
役柄の人生にはいろいろありますが、役者の方は生死を超越しているがゆえに泰然自若！　今年も透明度の高い作品を発表して参ります。

上なる自分からは下なる自分を見下ろせる。見渡せるといってもよいだろう。だが、下の自分が上の自分から見られたり従うことは出来ても対象化することは難しい。ましてやその存在に気づいてもいないとなると、土台、闇だというほかはない。自分の中にもある天井のようなバカの壁！

上なる闇へのセンサーを働かそう

天井も屋根も取り去って―いささか寒いが―遠来の星の瞬きのごとく未来からやって来る上なる情報に耳を澄ます。そこには大いなるものからの叡智＝真に美味しい情報が詰まっているのだから。何かが聞こえ出したら作曲は旨く行く。
図版にある「ロクリアン正岡作品集・Ⅲ」（絵画は「異星人の為の楽譜―死と重力」/　*作品集Ⅴの絵画をバッハじゃないが１８０度回転させている*）には私のカンバスコンサート時代の作品が満載だ。その中に恒松正敏氏の絵画「百物語」から特徴ある４枚を選び音楽に翻訳した「闇の明察」という組曲―*各曲名は、「観音の瞬き」「自我の化身」「異形の遊女」「冥界の祭り」。方々の図書館にあるので試聴可能―*がある。

『ロクリアン正岡作品集・Ⅲ』のＣＤカラージャケット

ある画塾の老教師を招いて自由な照合を促したところ、簡単に当ててしまいお互い得心したものだ。勿論、表面的な類似によるものではない。同様に、ご存じＥＳＰカード（正円、正方形、十文字、星型、波打つ川文様）の５枚の画像を５曲からなる組曲に翻訳したことがあったが、これも聴き手の中の若いピアニストがずばりと言い当てもした。確率から言えば１２０分の１という難しさなのだが、どうしてそういうことが可能なのか。私は勿論、音楽に翻訳されるべき対象を知っているし目の前に据えてすらいた。だが、もしそれを図面的に、あるいは概念的に捉えるばかりだったら、音楽の美は損なわれ、所詮、音楽には成るまい。

結論から言うと、目の前に置かれた絵画や図になり切ろうとしていると、暗い夜空から星の光が届いて来るように、存在からの波動が私に及び自身上昇して行くような変化が生じるのである。

複雑な絵画からイデアそのもののごとき単純な図形まで、存在そのもの（に与ること）によって―上からだが―支えられているということは驚くべきことだ。しかし、表象の中でも芸術の領域に入る物に於いては、存在そのものによる上からの支えを受けているということ、換言すれば、全的なものの頂点からの光に照らされている、ということがことのほか大切なのであろう。その輝きの度合こそが、芸術における美の高さというも量というも、そういうものを決定する、と言い切って良いのかもしれない。

今に始まったことではないが、作品分析とかいって賢しらな行為が繰り返され、論考が繰り広げられている。大抵は、形式と内容に分け、その照応という方法がとられる。それを人間に適用すれば、身体と精神、体と心の照応ということになるだろうが、そんなことでは一番大切なことは説明できないのである。

今、私は無知という闇について言及しているのだが、一番大切なこととは存在事物の“存在”ということである。目の前に楽譜が置かれている。上記のような方法で分析し、それで研究論文を書いたり講座を開いたりできよう。発信側も受容者もお互い分かり得たような気分になるのが普通だ。経済活動にもなり、そのほかいろいろ役立つこともあろう。だが、その作品の存在は、形式と内容に分けられる刹那にどこかへ飛び去ってしまっているのだ。存在は味わい感動するもの。その音楽を受容しその音楽になり切り、自分ごと輝くこと（自分がそこに含まれていない物に美を覚えるとはあまりに空しくないか）。もし、作曲家が創作時に上なる波動に与っている楽曲によるものなら、そして演奏がそれに応えるものであるならば、その

ような音楽受容・鑑賞の可能性は与えられている。あとはその人の資質や聴く姿勢の問題だ。要領と言えば、自己を空しく透闇状態にして、と言うところかと思われる。

茶室に憩う貞淑な幽女

『ロクリアン正岡作品集・Ｖ』のＣＤカラージャケット

これは二つ目の図の自筆画の名称である。この主人公は、大宇宙を極限まで凝縮したような小さな空間に幽閉され切っているようでいて、宇宙を超越した空（くう）の化身でそこから戻って来た使者＝生死超越体とも言える。其は存在忘却の方々の耳にそっと語りかける。「あなた、お寂しいでしょう。戻って来たわ！」と。其は恨みも怨念もない幽霊。それは透闇な心の持ち主ゆえに、万物に浸透している存在そのもの、この最も気づかれ難いものの息吹を伝えてくれる。

意識というものは、この世の生とそれを超越した永遠の生の境地＝存在そのものの地平に於ける境地を繋ぐ柱のようなものだ。下なる自分の意識を未来に開けば、上なる自分からの意識に出会えるものらしい。意識は物を照らす光であるかもしれないが、意識そのものは甚だ対象化しがたく、それを見ようとするとたちまち闇と化するもののようだ。そのことを一番痛感しているのは意識を使いまくる科学者であろうが、音楽家、わけても作曲家は闇へのセンサーに恵まれているものと思われてならない。作曲に専念すればするほどその闇に鋭敏になる近頃の私の体験を信じる限り……。

2.1.20　　（ろくりあん・まさおか　本会作曲部員）

【ロクリアン正岡プロフィール】

未来、ということを強調したので、ここでは私の近未来について紹介させて頂こう。本文では図や絵の音楽表象への置き換えについて語ったが、ここへ来て、モデルは狛犬、ライオン（来音）へと変わった。狛犬が 3 月 8 日夜、杉並公会堂小ホール（日本作曲家協議会のアンデパンダン展）、ライオンが 5 月 10 日夜、トリフォニー小ホール（日本音楽舞踊会議、作曲部会公演）。図や絵画は人の業。だが、ライオンは天然の業によるもの。人類も同様であり、図や絵のような人工物と比べようもないほどその根は—過去ではなく—無限の彼方＝遠き闇の奥にある。音楽ほど自然・天然的成分の多い芸術は他にあるまい。どうか“作曲者の闇へのセンサーの働き”にご注目頂きたい。

（ＨＰは　http://www.saturn.dti.ne.jp/locrian/）

特集：闇の世界と芸術（２）

世を騒がせた大事件と文学

作曲：中島 洋一

ドストエフスキーの小説『悪霊』と現実に起こったある事件

22～23 才頃であろうか、ドストエフスキーの文学の魔力に取り憑かれ、私の心は無限懐疑の闇を彷徨っていた。しかし、しばらくして私はその闇から抜け出すことが出来た。私を無限懐疑の闇に引きずり込んだのはドストエフスキーだったが、闇の中に光を照らし、闇からの脱出を支援してくれたのも、またドストエフスキーであった。この頃のことについては、以前本誌で『私の心の中の文学』というタイトルで書いたことがあるので、割愛する。

私の精神がドストエフスキーの嵐に遭遇してから 7 年後の 1972 年に社会を震撼させた一連の連合赤軍事件が起こった。

音楽現代

2012 年 2 月号　定価 840 円

♪特集　名演奏家の「おはこ」（２）
～往年の名ピアニスト篇
♪特別企画＝2012 年に来日するアーティストたち（２）
～ピアニスト、弦楽器奏者、室内楽団
歌手（リート）、合唱団
♪インタビュー
ヨルマ・パヌラ、石内聡明、上妻重之
吉田知昭、他
♪カラー口絵
・京都の秋　音楽祭
・黛敏郎／オペラ「古事記」
・ベルリン・フィル＋サイモン・ラトル 日本公演
・関西歌劇団「イル・トロヴァトーレ」

〒111-0054 東京都台東区鳥越 2-11-11
TOMY ビル 3F
芸術現代社　TEL3861－2159

「浅間山荘事件」については、私は興味本位から、コンサートをキャンセルして、テレビに釘付けとなりその大捕物の顛末を見届けた。しかし、その事件を切っ掛けに、連合赤軍リンチ殺人事件が発覚する。民を救済するための社会革命を目指していた筈の連合赤軍のメンバーが「総括」という名目のもと、12 人の同志達を次々と殺害するに及んだその事件に、私の心は寒気を憶えるとともに、直ぐさま、その 7 年前(1965 年)に読んだドストエフスキーの長編小説『悪霊（米川正夫訳）』を連想した。

昔読んだ小説なので詳しいことは憶えていないが、大凡のストーリーは元大学教授スチェハン氏の息子で革命家を自負するビュートルは、革命の推進を口実に殺人を犯し、同志や友人まで次々と手にかける。社会正義の実現を目的とする筈の行動

が、いつのまにか自分の身を守るための殺人に変貌して行くというものだったと思う。さらに、この小説の真の主役というべきスタヴローギン、虚無、信仰の観念を代表するキリーロフ、シャートフなどが登場し、彫りの深い思想を宿した作品となっている。

連合赤軍リンチ殺人事件に話しを戻すと、主犯格の一人、森恒夫は「あの時、ああいう行動をとったのは一種の狂気であり自分が狂気の世界にいたことは事実だ。私は亡き同志、他のメンバーに対し、死をもって償わなければならない」という自己批判書を残し、翌年拘置所内で自殺した。もう一人の主犯格永田洋子は死刑が確定していたが、昨年２月、拘置所内で病死している。

オウム真理教の事件

それから、23 年を経た 1995 年 3 月 20 日には、社会を恐怖に陥れた地下鉄サリン事件が勃発し、その 2 日後の 3 月 22 日には、山梨県上九一色村（現・富士河口湖町）の教団本部施設への強制捜査が行われた。5 月 16 日には、教団代表であった麻原彰晃（本名：松本智津夫）が同施設で逮捕されたが、この一連の捕り物についてのテレビ取材は「浅間山荘事件」の時と同様、加熱振りが凄まじく、殆どのテレビ局で長時間に亘って実況放送された。その頃のマスメディアはオウム真理教事件一色だったが､時間の経過とともに､この事件が人々の記憶から薄れて行ったように思う。しかし、昨年末、指名手配されていた元教団の平田某が自首したことで、人々の心にオウム真理教事件の記憶が蘇えったのではなかろうか。

ところで、私は 1989 年 7 月～1991 年 3 月の期間は、ヨーロッパと米国に滞在しており、坂本弁護士事件も、1990 年にオウム真理教が総選挙に打って出たことも、全く知らなかった。

私が初めてオウムと麻原彰晃の名前を知ったのは、1993 年頃にポストに投げ込まれていた一本のカセットテープからだった。テープのラベルには「革新的な音楽なので最初は違和感を覚えるかもしれませんが」というような但し書きが書かれていたような気がするが定かではない。残念ながら、このテープは今、私の手許にはない。私はオウムとは「鸚鵡」のことかと思っていたほど無知だったので、新進の音楽グループ？か何かの自己宣伝目的かと考え、中を開けてみることもなかった。

しかし、地下鉄サリン事件が起こり、オウム教団がニュースを賑わすに及んで、はじめてケースを開きテープを聴いてみた。テープの殆どは、教団が制作したオーケストラ音楽と教祖麻原自身の語りで構成されていた。音楽は革新的ではなく、稚拙と表現した方が似つかわしいほど陳腐でシンプルなものだったが、演奏水準は非常に高く、そのためある説得力をもっていた。

演奏はオウムの専属オーケストラの「キーレーン」で、ソビエト崩壊後経済的に困窮したモスクワ交響楽団員など、ロシアの優秀な演奏家に高額なギャラを払って構成したという噂があったが、その話をもっともと思わせるだけの好演奏だった。

なぜあのような事件が起こったか？

幹部の村井秀夫刺殺事件、教祖麻原の逮捕に前後して、多くの幹部が逮捕され、松本サリン事件、坂本弁護士一家殺人事件など、オウムが犯した犯罪が次第に明らかになっていった。当時の記憶を蘇らせると、あの年は 3 月 22 日以降、オウム真理教事件のニュースがテレビや新聞報道を独占し、当時教団の外報部長だった上祐氏や刺殺された村井秀夫などは連日のようにテレビに登場し、特に上祐氏は喋りまくった。

人々の関心は、有名大学出身者のエリートが多い教団幹部たちが、なぜあのような凶悪テロ事件に関与するに至ったか、ということだった。裁判は 16 年経て昨年ようやく結審したが、その間に世間の関心も次第に薄れ、事件はかなり風化してしまったように思う。裁判では殆ど何も明らかにならなかったが、裁判の目的は、どの被告がどの事件についてどれくらい関わり、どれくらいの量刑に値するかを判断することであり、なぜそのような行為をするに至ったかについて、その精神的プロセスを解明することが目的ではない。ましてや、教祖が殆ど何も語らない状況下で真相を解明することは殆ど不可能であった。

カルト宗教について

オウムの犯罪で中心的な役割を担った幹部教団員には、学業成績優秀で他人に対する思いやりもあり、両親にとって自慢の息子だったというような人物が少なくないようだ。そういう人物がなぜ坂本弁護士家族殺害や、地下鉄サリン事件など凶悪な事件に関わったのか。

当時、オウム真理教を支援したということで批判された宗教学者のＳ氏が、某ジャーナリストから「なぜ貴方は教団の凶悪犯罪を見抜けなかったのか」という質問を受けた時､「村井さんなどの穏やかでにこやかな人柄と清んだ表情に接していて、あのような事件を起こした人達とは到底想像出来なかった」というように答えていたように思う。しかし村井秀夫は、いたいけな赤ん坊まで手に掛けた坂本弁護士一家殺人事件の実行犯である。

では、村井は残忍な事件を犯しながら、なぜあのような穏やかな表情をしていたのか。以下は私の仮説だが、麻原のもとで修行する以前の彼なら、小さな子供を手に掛けるような行為は、とてもできなかったであろう。尊師のもと修行を積み重ねて行く中で、グル（尊師）の声は神の声であり、自分の考えを捨て去り麻原に帰依

し、自分の心を麻原の意志と同化させることこそ、真の悟りへの道と考えるようになったのではなかろうか。殺すのは可愛そうだなどと考えるのは修行が足らず、自分の心から世間的価値観という雑念を拭い去ることが出来ていないからだ。尊師がその行為をポア（悪行を積んだ人間の現世における生を絶つことで、その人間の魂をより高い世界に転生させ救済すること）というのだから、迷いを捨ててそれを信じなければならない。そう思い込むことが出来たからであろうか、村井の穏やかな表情からは「罪」を犯したという陰りがまったく感じられなかった。

私は、自身の魂を極限まで追い詰め、それを乗り越えた人間なら、誰もが信仰を持って生きていると考えている。人は、如何に生きるべきか、真理とは何かを問いかけながら光を求めて闇を彷徨い続ける。キリスト教徒なら、自分の原罪を意識し苦悶し続けながら、神の声を聞こうと努め、仏教徒なら無明と向かい合いながら悟りの光を求め続けるであろう。神の声は自分自身で探さなくてはならない。そういう内的葛藤の積み重ねの中で自我は鍛えられ成長して行く。しかし、オウムのようなカルト教団では、グルの声が神の声であり、絶対である。それを完全に信じ従うことで自我は破壊され消滅して行く。それがカルト宗教の怖さである。

マインドコントロール、洗脳について

1995 年当時、マインドコントロールという言葉が流行った。しかし、私には、たとえ未熟な若者といえども、人間の心はそれほど簡単に他人にコントロールされるものとは思えない。

出家してオウム教団に入信した若者達の心には、日常的な現実生活に対して、そういう世界の中で充足することが出来ず、孤独感、疎外感を感じていた者が多かったのではなかろうか。「給料が上がった。平社員から係長に昇格した。巨人が勝った。競馬で負けた。」そんなことに一喜一憂している周囲の人々の生活が空しく馬鹿馬鹿しく感じられ、そんな希薄な世界から脱して、もっと精神的に充実した生活を送りたいという強い願望を抱いていたものと想像している。

私は、1995 年当時、勤務校の教員組合新聞に寄せた文の部分に、〈オウムに惹かれて行くわが子に対して、親は世の常識論を振りかざすだけで、確たる自己の信念や思想を示すことが出来ず、「お前は教団に洗脳されているのだ！せっかく勉強してＸ大の医学部に入ったのだ、医者を目指して勉強しろ！」などと叫び、息子に「一体それが何になるのですか！あなたこそ世の中の常識に洗脳されているだけですよ！」と反撃されて、返す言葉も出てこなかったというようなケースもあったのではないかと想像しています。〉という事を書いている。

マインドコントロールと洗脳では社会心理学的には意味が違うらしいが、信者の中には、単にマインドコントロールされたからだけではなく、ハルマゲドン（世界

最終戦争）を予言し、世直しを説く麻原の言葉に共鳴し、主体的に選択し出家した者も多く存在したことであろう。

オウム真理教事件を、テレビ局が取材していた時、フランスのある女性ジャーナリストが「この事件を日本でしか起こらない特殊な事件と考えてはいけない！」と大声で叫んでいたことが思い出される。

狂信的な善への志向は巨悪を生み出す苗床？

テレビやテープで聞いた麻原の話は、私には殆ど荒唐無稽に思えたが、取材していたジャーナリスト達に向かって「みなさんにとってオウム真理教は、金儲け主義のインチキ宗教団体でなくてはならんのでしょう」と叫び、教団を自ら反社会的と位置づける麻原に、世の中に対する激しい「呪詛」を感じた。彼が捕まる際、狭い空間に大金を持って隠れていたことが報道され、人々は「金の亡者」と嘲笑し、「事件についてすぐ吐くのではないか」と予測した人もいたが、裁判では始めの頃は喋ったものの、やがてぶつぶつ独り言を呟いたり、居眠りするようになったという。拘置所でも最近は弁護士とも一切語り合わず、失禁したりすることもあるようで、長い拘置生活が続く中で精神に異常を来しているという報道もなされているが、私はそうは思わない。それは仮病と憶測している。

麻原は自分自身の誇大妄想性について、ある程度は自覚していたものの、ある時からは本気になって「世直し」を考えていたのではなかろうか。

ところで、麻原が唱えた「ハルマゲドン」は、一般の人々の関心の対象とはならなかったが、もし、国家が窮状にある時、「飢えたる民を救済せよ」、「国家の威信を回復せよ」と唱え、世直しを志向する者が現れたらどうであろうか。2.26 事件の北一輝、ヒットラーなどはこの類の人間に属するのではなかろうか。

昔、『アルトロ・ウイの興隆』というブレヒトの戯曲を読んだことがある。ヒットラーを戯画化した作品で、面白いところもあったが、そこに描かれた、人物像はヒットラーの実像とはほど遠く思われた。もし、ヒットラーが単に権勢欲、物欲が強いだけの詐欺師的人物だったら、果たして、あれだけ多くの人々を巻き込むことが出来たであろうか。ヒットラー自身が本気で世直しを考え、それが、それを期待する民の心と大きな共振を起こしたからこそ、あのような事になってしまったのではなかろうか。しかも、独裁体制のもとでは、一度動き出してしまえば根本的軌道修正は不可能となる。

『悪霊』、連合赤軍事件、オウム真理教事件、ヒットラーをつなぐ線があるとすればなんだろうか。それは狂信的な善への志向が、時には大きな厄を招くということである。単なる殺人鬼なら、せいぜい 10 人程度の人しか殺せないが、正義という名のもとで、人は数十万、数百万の人間を殺戮できるのだ。善と悪は対極にある

ように見えて、実は殆ど隣り合わせに存在し、人が驕慢になり持続的な自己批判を怠ったとき、大きな善への志向ほど、巨大な悪を生み出す苗床となる。「自分を正しいと思いたい、自分の存在を意義あるものと捉えたいという思いさえも、物欲や権力欲がそうであるように、一種の欲望でもあるのだから。」

私はドストエフスキーの文学から、そのような啓示を受けたのだった。

人生の糧としての文学、芸術、哲学

世の中の救済を信じて行動し、気がついてみたら救済どころか多くの人々を殺め、多くの人々を不幸に陥れていた。地下鉄サリン事件の被害者の中には、いまだに後遺症に苦しむ人も多く、さらにその家族も巻き込み、被害者とその周囲の人々に与えた苦悩の大きさは計り知れないものがある。

犯罪に関わった幹部教団員からは、「人間を辞めたくなった」、「被害者の皆さんに申し訳ない」など、反省の言葉が聞かれた。しかし、自我が破壊され、明晰な自意識を失った状態で起こした事件だけに、多くの麻原の弟子達は、そこに至ったプロセスについて、冷静に分析、解明することは出来ないのではなかろうか。「狂気の世界にいた」という自己批判書を残し自殺した連合赤軍の森恒夫も似たような状態にあったのかもしれない。

ジャーナリストでオウム・ウオッチャーの有田芳生氏は、当時のオウム道場の本棚には文学書が一冊も置かれていなかった、と証言している。

オウムに入信した信者および元信者達の多くが、かりに現実の世間での生活になかなか馴染めなかったとしても、麻原に取り込まれる前に、多くの文学書、哲学書に接する機会があったら、彼等は違った道を歩むことが出来たかもしれない、と考える。彼等の中には、繊細な感性と真摯な心をもつ資質の良い若者達が多く存在したのではないかと想像しているからである。

私の青年時代は、現実生活と接点を持てないほど、精神的に孤立していた訳ではないが、それでも孤独に陥り、一人で文学書を読み耽った時期があった。

文学に接することで、それを書いた人間の心の軌跡を辿ることが出来る。そして、その中から必ず自分の心と重なりあうものに出逢うことがあるのだ。また、時には鬱陶しくそして煩わしく思われていた日常生活の中にさえ、彫りの深いもの、魅力的なものに沢山出逢う可能性があることに気づかせてくれる芸術作品もあるのだ。

文学、そして音楽、美術などの芸術は、人に楽しみを与え、心を慰めてくれる存在であろう。しかし、それだけではない。勇気をもって心の闇に踏み込み、そして、その先に射し込む光に気づかせてくれるものでもあるのだ。

（なかじま・よういち　本誌編集長）

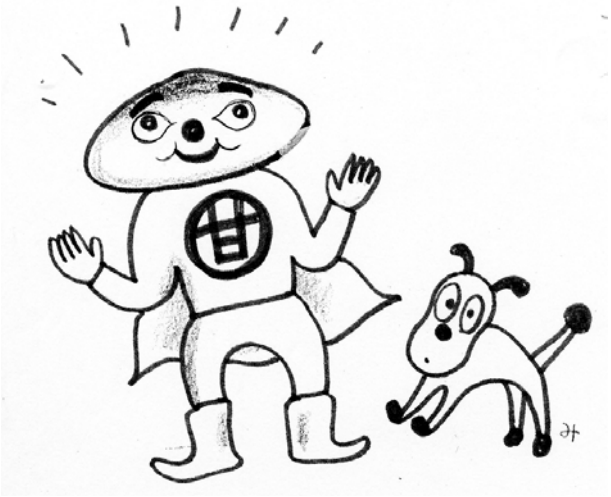
連載　**音・雑記－ひなの里通信**　（45）　狭間 壮

パンの話

― 6000 年の時空をこえて ―

コンサートの差し入れで、「甘食」をいただいたことがある。甘食、What？の世代があるかもしれない。甘食は「あましょく」と読む。いま手にしているわけではないが、だいたい直径約９㎝、高さ約５㎝ほどの、円錐状で、うすい甘味の菓子パンだ。

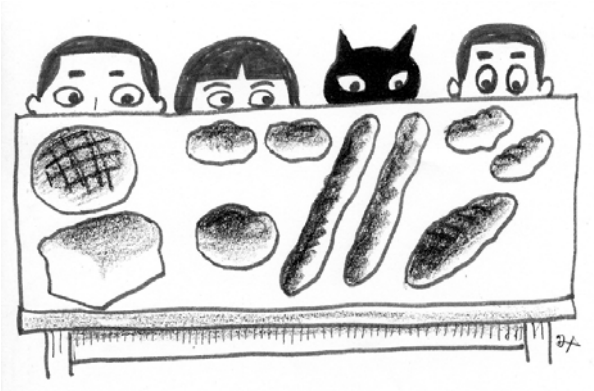
説明が不足で実像が浮かばないかもしれない。それならばということで、やなせたかしの「アンパンマン・スーパー大図鑑」で捜してみるが、1600 登録のキャラクターの中にもいない。「甘食マン」なんて、登録されていそうだけど・・・、よほど人気がないようだ。そういえば、近ごろパン屋でみかけない。



この甘食、昭和の 20 年代には１ケ５円であった。他の菓子パンは 10 円。いつだって、「どうしておなかがへるのかな」のハラペコ少年であったから、おやつにと 10 円もらったら、甘食２ケに軍配をあげた。

そんな私の思い出話をおぼえていて、届けてくれたのだった。

うろおぼえだが、「パン屋さんのお店の前を　かけて通りゃ／アンパン、ジャムパン、クリームパン／パン屋さんのお店の中は　いい匂い・・・」という歌があった。



パン屋へのお使いのときには、いつも口をついて出た。今でも、ふっと浮かぶ。

朝食用の焼きたて食パンを買いに行く。朝早いお使いは、ついでにおやつのパンを買っていい。ごほうびだ。アンパン、ジャムパン、クリームパン、歌に出てくるパンが、くりかえし頭の中をかけまわる。そして、２回に１回はやっぱり甘食となる。腹もちがいいのだ。

朝食にトースト。昼は給食でコッペパン。そして、おやつに甘食。私のパン好きは、このころの暮らしのスタイルによるものかもしれない。

ところで、最近パン焼き器を買った。トースターではない。家庭でパン作り！の電化製品。ホーム・ベーカリーというすぐれものだ。

種類にもよるのだろうが、パンは焼きたてが旨い。仲間うちに、ホーム・ベーカリーでパン作りをする先達がいて、時々、焼きたてのお相伴にあずかっていたのだが、ついに吾が家でも、となったのだ。

レシピ通りに材料を投入すれば、約４時間にてできあがり。その間、手出しは無用。

手作りパンとは気が引けるが、一応自家製パンである。ふんわりキツネ色の食パンだ。

気になるのはそのお味・・・、旨い！これは私の感想。すべての賛同を得られるかには自信はないが。しかしこれは、「今、いい匂いで焼きあがったよ！」感がプラスされて、最高！ということになるのだ。

このホーム・ベーカリー、食パンだけではなくレシピ通りに事をはこべば、30 種類以上のパンができる。残念ながら、甘食のレシピはないのだけれど。

「パンのマーチ」という歌がある。峯陽作詞／小川寛興作曲の“パン賛歌”だ。これは家人の子どものころの愛唱歌の一つだという。

内容を聞けば、この歌、パンの種類から、各国での呼称、はたまたさかのぼってその歴史までをも教えてくれる。

「むかしパンを、やいたのは／6000 年も前のこと／小麦を粉にして／こねあげて／エジプトの母さんたちが／おいしいパンをやきあげた」そして、「イギリス・ブレッド／イタリア・パーネ／インド・チャパティ・・・」といったぐあいだ。

6000 年前のエジプトの母さんたちのご苦労を、時空をこえて、ここ松本の地で、小

麦を粉にせず、こねあげもせず、おじさんはスイッチ ON するだけ。４時間待てばパンが１斤焼きあがるのだ。安直すぎて、エジプトの母さんたちに申し訳ない。

しかし、ここまでくるのに 6000 年もの時間を必要としたのだとすれば、パン１斤、ただ今 6000 年と４時間で焼きあがりました、と考えられなくもない。ますます感動が深くなってくるではないか。

さて、差し入れの甘食だ。コンサートの後、宿に戻って食べた。うれしく、なつかしい味だ。甘食を２つ胸にあてて、アマショク！と悪ふざけした子どものころのことまでもが、思い出された。

先ほどから甘い匂いが漂ってくる。朝８時にスイッチを入れたホーム・ベーカリーからの「そろそろですよ！」のサインだ。干しぶどうを 60ｇ入れたので、ぶどう入りの食パン「レーズンパン」が、焼きあがる。

【筆者紹介】狭間 壮（はざま　たけし）：中央大学法学部法律学科卒。音楽教育を関鑑子氏に、声楽を大槻秀元氏に師事。大学在学中ＮＨＫ「私達の音楽会」出演を機に音楽活動を始める。松本市芸術文化功労賞、他を受賞。夫人の狭間由香氏とのアンサンブルで幅広い音楽活動を展開している。

連載　名曲喫茶の片隅から　　宮本 英世

〔第 26 回〕一番の酒豪は誰か？

画家とか小説家、詩人など、創作活動をする人たちには、酒（アルコール）の好きな人が多い。いや、もう一つタバコ好きも多いが、理由は考えるまでもないだろう。度を超せば身体に悪いことはあるにしても、ともに血行（血圧）をよく（高め）し、脳を刺激して頭の回転を滑らかにする。つまり曲想・アイディアが沸きやすいからかもしれない。

作曲家の中にも、古来酒好きだった人は大勢いる。ベートーヴェン、ブラームス、シューベルト、モーツァルト、ブルックナー、グルック、ムソルグスキーらは、このテーマではまっ先に挙げられる代表選手といってよいだろう。

祖父が宮廷歌手のかたわら、内職として酒の販売をしていたベートーヴェンは、祖母と父親がそのためにアルコール中毒で亡くなったことを気にして、決して飲み過ぎない慎重な飲み方。つまり健康的な飲み方を忘れなかった。主としてワインで、通常は赤、時には白やビールも飲んだようで、あくまでも魚や肉の料理をおいしく食べるためだったといわれている。1827 年 3 月、死ぬ直前のエピソードもワインに関するもので、マインツの楽譜出版社から届いたライン産のワインを前に、「残念！残念！遅すぎた！」と口惜しがったのが、じつは最後の言葉である。

ブラームスの場合は、ウイスキーである。彼にも度を超したエピソードはないようだが、注がれたグラスからこぼれた分を「勿体ない」といいながら人前でなめた、という話が残されている。肝臓癌で亡くなっていることからも、かなりの酒好きだったのは間違いないだろう。

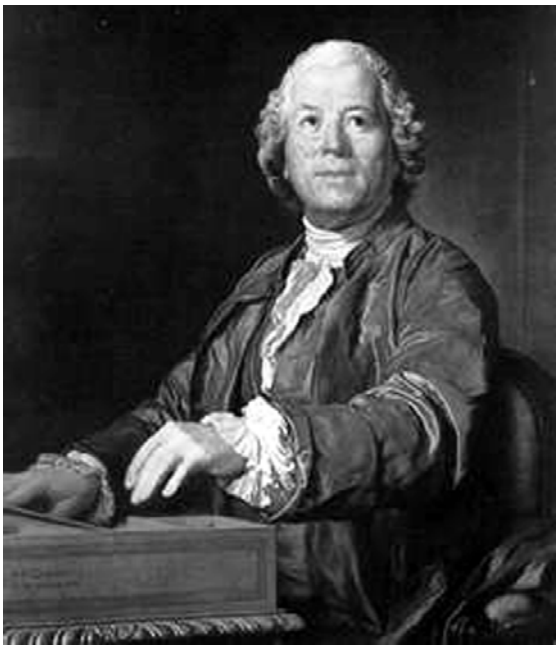
シューベルト、モーツァルト、ブルックナーのそれはビール。シューベルトの場合は、朝 6 時から午後 1 時頃まで机に向かって仕事をすると、それからレストランや酒場へ行き、仲間たちと飲むのが日課だったと伝えられている。カネがない時はビールより安価なプンシュ酒（ポンチ）のこともあったというが、ともあれほとんど毎日。おかげでコロコロのビール腹になって「ビヤ樽」の仇名が付けられたという。生涯独身のままである。

一方モーツァルトも、「銀の蛇」という行きつけのビヤ・ホールを持っていたというから、日常的にかなり飲んでいたのは確かだろう

ナンバー・ワンと思われるのはアントン・ブルックナー（1824～96、オーストリア）のビールである。彼もまた行きつけのビヤ・ホールを持っていたが、毎晩 10 時頃に現れると、食事ともども、なんとジョッキ 12～13 杯を平気で飲み干していたという。仮に 0.5 リットルのジョッキだとして 5～6 杯。日本のビール大瓶 8～9 本である。

もっと大きなジョッキだとしたら、10 本以上ということになる。大変な健啖ぶりだが、しかし亡くなったのは肺炎によってである。

死因から、これも酒豪だったと思われるのはグルック（1714～1787、ドイツ）とムソルグスキー（1839～1881、ロシア）である。どちらもブランデーがもとで亡くなっているのだが、それまでを考えるとほとんどアルコール中毒である。



クリストフ・ヴィリバルト・グルック
（1714-1787）

グルックの死因は、事典によると脳溢血ということになっているが、それは表向きで、真相はこうだ。日頃ブランデーが大好きだった彼。晩年に軽い脳卒中で倒れて以来、医者からこれを禁じられ、妻からも厳しく見張られていた。ところが妻が何かの用事で外出した折、家中を探して一本のブランデーを見つけてしまった彼、「しめた！」とばかりに夢中で飲み始めたところ、禁酒で免疫が無くなっていたのか、あっという間に倒れて、そのまま昇天してしまったのである。

ムソルグスキーもこれと同じ。26 才の時に母親を失くして以来、急速に酒量を増やした彼は、42 才の 1881 年、演奏中に倒れて病院に収容されると一切の酒を禁じられる。そしてまじめに養生を始めたかと思われた誕生日目前のある日、付添いの一人がお祝いのつもりかうっかりとブランデーを贈ったから、たまらない。喜んで飲んだ彼はたちまちにおかしくなり、奇しくも誕生日（3 月 28 日）の朝に息を引きとってしまったのである。42 才。日本では厄年にあたる年令であった。

以上のような検証から、ビールではブルックナー、ブランデーではグルックとムソルグスキーあたりが一番の酒豪といえるかもしれない。それぞれに傑作を残しているけれど、酒の力によるかどうかは定かでない。

【宮本英世氏プロフィール】1937 年、埼玉県生まれ。東京経済大学経済学部卒。日本コロムビア（洋楽部）、リーダーズ・ダイジェスト（音楽出版部）、トリオ（現ケンウッド）系列会社社長を経て、現在は名曲喫茶「ショパン」（東京・池袋）の経営ならびに音楽評論、著述、講演、講座などを行う。著書は「クラシックの名曲 100 選」（音楽之友社）、「クイズで愉しむクラシック音楽」（講談社）、「喜怒哀楽のクラシック」（集英社）など多数。

【連載】

音盤奇譚

板倉 重雄

第 31 回

ジェラール・プーレの詩曲

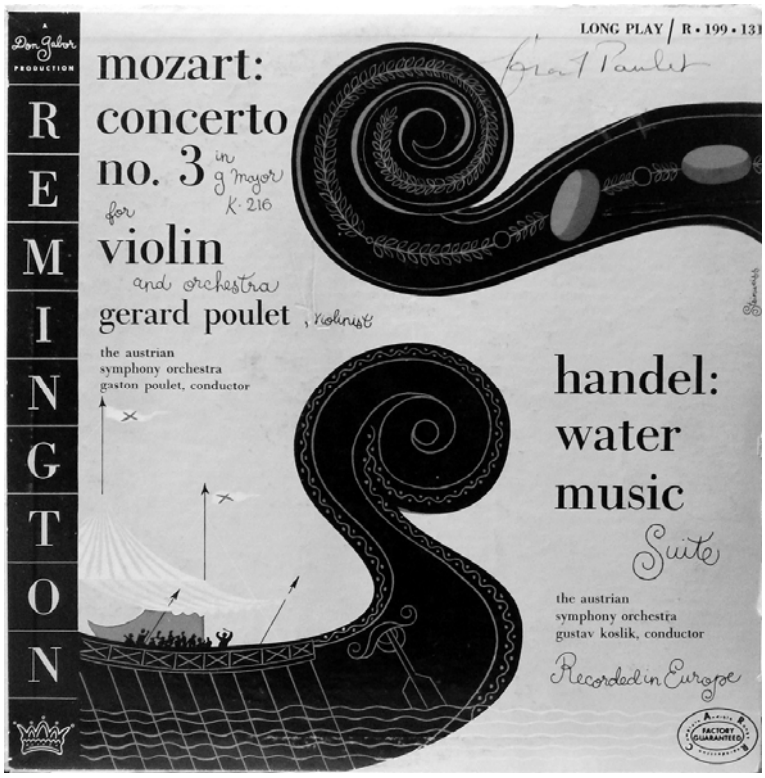
いつか聴いてみたいと思っていたフランスのヴァイオリニスト、ジェラール・プーレ（1938～）が珍しく早稲田大学フィルハーモニーに出演するという。入場料も格安で、昨年の 12 月 11 日、大宮ソニックシティへ軽い気持ちで聴きに出かけた。

マスネの《絵のような風景》を、最近の学生オケは上手いなと思いながら聴いた後、いよいよプーレの出番である。紫のジャケットに白シャツ、紫地に白の水玉の蝶ネクタイというお洒落ないでたち。顔の表情は厳しく引き締まり、超一流の芸術家だけがもつ辺りを払うような威厳や風格が感じられた。

プーレの演目はショーソンの《詩曲》とサン＝サーンスの《序奏とロンド、カプリチオーソ》である。とくに《詩曲》はわたしにとって理解しがたい曲だった。何か深い精神性をたたえた曲に聴こえていたが、雲をつかむようで曲が長く感じられていたのである。

冒頭 pp のレント・ミステリオーソが矢崎彦太郎の指揮により羽毛で頬をなでるように開始され、木管が甘美な旋律を歌い繋いだあとプーレが登場。プーレの音は細かなヴィブラートで引き締まり、鮮やかな輝きを放っている。私はすぐにレコードに聴くティボーの音を連想した。そして押し寄せては退いてゆく波のように、情感が熱く高まり、そして収まっていく。その頂点ではプーレと指揮者がまるで口づけでも交わすように目と目を見合わせるのである。私は直感した。

「ああ、これはヴァイオリンとオーケストラによる《トリスタンとイゾルデ》なのだ」



家に帰り《詩曲》の録音を聴き直す。いままでヨロヨロの演奏に聴こえていたティボーが神品に聴こえる。フランチェスカッティも情熱的かつ官能的。一方世評の高いチョン・キョンファは余りに禁欲的だ。どうもフランス系の奏者には、ある一定の作品観が受け継がれているようだ。改めてクラシック音楽の奥深さについて痛感させられた演奏会だった。

●ショーソン：詩曲

（前ページ写真）

ジャック・ティボー（ヴァイオリン）

ウジェーヌ・ビゴー指揮

コンセール・ラムルー管弦楽団

［Philips　PHCP1266～7（CD）］（廃盤）

1950 年録音。ジャック・ティボー（1880～1953）はフランス、ボルドー出身。戦前 2 度来日し、オールド・ファンの間で人気の高かったヴァイオリニスト。1953 年、3 度目の来日途上、飛行機事故のため亡くなった。

●モーツァルト：ヴァイオリン協奏曲第 3 番　（写真：左上）

ジェラール・プーレ（ヴァイオリン）

ガストン・プーレ指揮オーストリア響

［米レミントン　R.199.131（LP）］（廃盤）

1952 年発売。プーレ 14 歳のデビュー盤。指揮のガストン（1892～1974）は父親で、1917 年にドビュッシーのヴァイオリン・ソナタを作曲者とともに初演した人でもある。演奏会修了後、聴きなれないカデンツァについてプーレ本人に質問したところ、「私の父、ガストン・プーレの作」と教えていただいた。

【板倉重雄氏プロフィール】1965 年、岡山市生まれ。広島大学卒業後、システム・エンジニアを経て、1994 年 HMV ジャパン株式会社に入社。1996 年 8 月発売の CD「イダ・ヘンデルの芸術」（コロムビア）のライナーノーツで執筆活動を開始。2009 年 9 月、初の単行本「カラヤンと LP レコード」（アルファベータ）を上梓。

報告　日本音楽舞踊会議　創立５０周年記念
新年会が開かれました。

本会会員、本誌読者、執筆者や関係の方々が親しく語り合う、恒例になりました日本音楽舞踊会議新年会が、１月７日に昨年と同じ高田馬場駅前の「夢々(Mumu)」で催されました。

今年は本会が設立されてから５０年目に当たります年ですので、５０周年記念事業の本年度第１弾と位置づけまして、本誌や会報「エコー」などを通じたりと、皆さまへのお知らせを多くさせて頂きました所為も有りましてか、延べ４０人を超える盛会となりました。

会は例年のように助川敏弥代表のご挨拶と深沢亮子代表のご挨拶の後、戸引小夜子理事長の乾杯の音頭に始まり、何よりも皆様同士のご歓談に華がさき、止まりませんでしたが、深沢亮子、安田謙一郎両氏によるベートーヴェン：ピアノとチェロによるソナタ第４番、１楽章の演奏→ご出席の皆様にマイクを回し一段落したところで→北川暁子、北川靖子ご姉妹によるヴァイオリンとピアノの演奏で、ロンディーノ、美しきロスマリン他、→歓談の後→声楽部会員指導で「皆さまもご一緒に」と早春賦　他を歌い上げる。

と言う、これも恒例となりました西山淑子会員のＭＣでの進行で、５０周年を祝う豪華な演奏と楽しい会話の中でのあっという間の２時間半を過ごしました。

初めてご出席の方々から「絶対来年も来るぅ」と企画側としては嬉しいコトバを頂きました。当夜の写真を載せ、皆さまにも楽しい会の雰囲気をお伝えします。

報告:事務局長・高島 和義

演奏する安田氏（左）、深沢氏（右）

演奏する北川靖子氏（左）、暁子氏（中）

乾杯の音頭をとる戸引氏

歌を歌う声楽部会の面々（後列）と、歌詞を読む方々

新年会の参加者全員による集合写真（途中で帰られた方を除く）

★+*☆*+★+*☆*+★+*☆★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆*+★+*☆★+*☆

【1 月号の訂正】以下の誤りについて深くお詫し、訂正いたします。

① 表紙の写真の説明にある日付　2012年12月6日【誤】　→2011年12月6日【正】

② 21P 時評　屋（や）か、家（か）か　　終わりから二行目

身銭を切って【誤】→身を切って【正】

訃報：林　光

独自の日本語オペラや劇音楽で知られる作曲家の林光（はやし・ひかる）さんが５日、死去した。８０歳だった。告別式は親族のみで行う。喪主は未定。

東京生まれ。東京芸大作曲科を中退後、音楽と社会のかかわりに関心を深め、合唱曲「原爆小景」で独自のスタイルを確立した。１９７５年に日本語オペラの創作・上演に取り組む「オペラシアターこんにゃく座」の座付き作曲家兼音楽監督（現芸術監督）となった。代表作に「森は生きている」「セロ弾きのゴーシュ」「変身」など。

劇音楽や映画音楽も多く手がけ、９５年に「座・新劇」の音楽で第２回読売演劇大賞の優秀スタッフ賞を受賞。映画では新藤兼人監督の「午後の遺言状」、大島渚監督の「少年」などの音楽を担当した。９６年にビオラ協奏曲「悲歌」で尾高賞を受賞。同年、紫綬褒章。また、社会状況への鋭い問題意識を反映した音楽評論でも知られた。

2011年９月24日、自宅近くで転倒し、頭を強く打って入院していた。

（2012年1月7日　読売新聞）

訃報：アレクシス・ワイセンベルク

アレクシス・ワイセンベルク氏（フランスのピアニスト）８日、スイスのルガノの医療施設で死去、82歳。パリの音楽関係者が９日明らかにした。死因などは不明だが、約30年前からパーキンソン病で闘病生活を続けていた。

1929年、ブルガリアのソフィア生まれ。後にフランス国籍を取得。米国などでピアノを学んだ後、著名指揮者のカラヤン氏に見いだされ、67年にソリストとしてベルリン・フィルハーモニー管弦楽団と共演。その後、欧米各国のオーケストラに招かれ、演奏会や録音を行った。ラフマニノフとバッハの演奏に定評があった。

（日本経済新聞2012/1/10　パリ＝共同）

訃報：玉木宏樹

作曲家の玉木宏樹氏（たまき・ひろき）が８日午後７時４０分、肝不全のため東京都目黒区の病院で死去。神戸市出身、６８歳。葬儀・告別式は近親者で済ませた。喪主は妻とみ子（とみこ）さん。

時代劇「大江戸捜査網」、ＮＨＫ連続テレビ小説「おていちゃん」などのテレビドラマのほか、映画やＣＭの作曲も多く手掛けた。ヴァイオリン奏者としても活躍した。

（毎日新聞社　毎日jp 2012年1月14日）

訃報：別宮貞雄

戦後日本を代表する作曲家の一人で、伝統的作風を貫いた別宮貞雄（べっく・さだお）さんが、１２日午後９時半、老衰のため亡くなった。８９歳だった。

告別式は１６日午前１１時半、東京都武蔵野市御殿山１の７の８カトリック吉祥寺教会で。喪主は長男、剛夫氏。

東京大理学部で物理学などを学びながら、作曲を池内友次郎に師事。在学中の１９４６年に「管弦楽のための二章」が毎日音楽コンクールで２位に入賞した。その後、パリに留学し、ミヨーやメシアンに学ぶ。前衛音楽に同調せずに古典主義的な様式を守った。主な作品に「ビオラ協奏曲」、歌曲集「淡彩抄」、オペラ「葵上」など。日本現代音楽協会の委員長を長年務め、現代音楽の振興に尽力した。８８年紫綬褒章、９４年勲三等瑞宝章。

（2012年1月13日　読売新聞）

追悼・音楽界

昨年１２月、そして今年１月と、音楽界は多くの人を失いました。この度、生前故人と親交のあった方々から、それぞれの思いをご寄稿頂きました。ここに掲載するとともに、ご功績とご遺徳をしのびたいと思います。　（編集部）

追悼・三木稔

今井重幸
（作曲家、指揮者、舞台芸術企画・演出者）

振り返れば、三木稔君に出会ってから既に６０年以上は経って居る。

互いに伊福部昭に師事した古弟子会の仲間同志で、先輩の芥川也寸志・黛敏郎、後輩の石井眞木に挟まれた我々を含めた１２人の仲間と共に、議論をし、仲良く交流した時代が懐かしい。

我々は師匠の影響で管弦楽曲に集中したが、三木君はその後合唱曲、邦楽器へとエリアを拡げ、’64 年にはその同志を牽引して「日本音楽集団」を立ち上げ、現代邦楽の基礎と大合奏の様式を確立、多くの現代邦楽作品を残した事は大変な功績である。

更に’70 年代に入ってグランド・オペラへの挑戦が始まり、谷崎潤一郎原作「春琴抄」を始めとして、次作には英国からの委嘱に依る英語のシナリオに依る”An Actor's Revenge”「あだ」（雪之丞変化）。以後日本を題材とした九曲のオペラを書き上げ、日本のオペラ作品の諸外国への認知にも大きく貢献した。

事程左様に三木君は、生涯強靭な意思に依って膨大な音楽を書き続け、又プロデュースに対してもその能力と實行力を発揮し、疾風の如く駆け抜けてしまった。

しかし願わくは師匠・伊福部昭の如く、あと十年は長生きし、緩十番目のオペラを書き乍ら寛いだ老後を過ごして欲しかった。其れにしても良き仲間に先に逝かれ、寂しい限りである。心よりご冥福を祈る次第である。

「悲しみを乗り越え、三木作品を世界へ」

落合　良（「結（ゆい）の会」会長）

「コレだ！」初めて三木先生の音楽を聴いた時感じたのです。当時の私はソニーで、海外出張の都度、日本のビジネスマンは、仕事の話が終わると沈黙、もっとコミュニケーションが必要と思っていたのです。出張地で美術館、博物館、音楽会、ミュージカルも結構ですが、日本の芸術文化の話をすれば良いのに…。

1988 年、メト・スカラ・ミュンヘンオペラ来日の年、僕のオペラ《じょうるり》をセントルイスオペラ劇場が日生劇場で公演するけど、入りが心配と言われた三木

先生に応えて、三木稔後援会「結の会」の誕生です。米国の歌手達が文楽・道行きを英語で歌い演じている、三木稔に惚れ込んだコリン・グレアムの台本演出に、振付は尾上菊紫郎で、美術・衣裳は朝倉摂に応えたアメリカのオペラ歌手たち、満員の観客は大感激でした。

「結の会」では、三木先生の作品を、三木先生解説で、三木先生が選んだ演奏家や歌手が三木先生と私達の前で実演！この贅沢！時には海外へもご一緒にと二十年以上も続く。彼の八作目、台本は瀬戸内寂聴初のオペラ《愛怨》は、新国立劇場の世界初演をDVD化、これを観たハイデルベルグ劇場が2010年に日本語で8回公演。最終日を三木稔・瀬戸内寂聴さんと鑑賞。今はもう、このようなことは望めない。然し三木稔作品を世界へ発信し続け、世界の人々を再び日本へ、招き寄せることは出来ます。悲しみを乗り越え、さぁ始めましょう。

「現代邦楽の先駆者的存在であった三木稔先生のご逝去を悼み」

坂田誠山

（公益社団法人日本尺八連盟会長・オーラＪ代表・ドルチェグループ代表）

邦楽界は又一人大事な作曲家を失いました。三木先生との出会いは1971年に 日本音楽集団に入団した時に遡ります。以来オーケストラ 「アジア・アンサンブル・オーラＪを結成するなど、ずっと行動を共にし、三木先生のプロデュースされる音楽シーンに色々な刺激を受けたり、普通の邦楽人では味わえない貴重な体験を数多くさせてもらいました。特に三木オペラへの参加は色んな 要素が結集した総合芸術の素晴らしさを身近に体験し、音楽の素晴らしさを改めて認識させられた時でもありました。正に音楽の理想的な状況の中にどっぷりと浸かっている自分は演奏家としての至福の時でもありました。この時の体 験が、邦楽でも一般の大観衆を集められるような演奏会を開催し、観衆に喜んで頂くような状況を作らなければならないと強く感じ、この事がその後の私の 音楽活動の大きなヒントになっております。

真摯に邦楽にも向き合い、オリジナリティーを重んじ、そのアイデンティティーを大事にされた作風は、外国の作曲家にも大きな影響を与えています。

先生は作曲以外の様々な状況の中でもその力を遺憾なく発揮されました。海外公演の必要性を強く感じられ、もし失敗したら自分の私財を投げ打ってまで実行しなければならないと思わせる先生の行動力には驚かされます。

色んな場面で、その世界に掛ける思いの強さを痛切に感じさせられました。 後に残されたモノはこの姿勢を継いで、斯道に励んでいく事がその恩に報いることになるでしょう。

「三木稔を悼む」

谷　始

痛恨、親友・三木稔を失いました。

僕たちは、終戦直後の昭和 22 年 4 月、岡山の旧制第六高等学校に入学、学寮の同じ部屋で起居を共にし、一緒にコーラスの練習にも励み、以来、「お前、俺」の呼び捨てで 64 年やってきました。

彼は、「岡山ヒューゲルコール」、この僕たち六高生中心で作った混声合唱団のリーダーとして、戦後、おそらく地方では最初の、メサイア演奏会を大成功させ、なんと、芸大に入って作曲家になってしまいました。僕たちが青春を捧げ、人生の原点となったメサイアが、彼にとっても音楽活動の原点だったと思います。

彼を、私の属していた男声合唱団「東京リーダーターフェル」に引っ張り込んだ縁で、「レクイエム」、「阿波」など、珠玉の合唱作品が続々と生まれたのも嬉しいことでした。

日本で初めての、邦楽器オーケストラ、「日本音楽集団」の旗揚げ公演で、僕は、ホールの熱気の高まりに感動して、『三木は日本の音楽を変える』と確信しました。

そして、その後の、彼の東西文化融合を目指した壮大な音楽活動、ライフワークのオペラ 8 連作の発表会に駆けつけて、客席から力一杯拍手声援を送り、その確信を実感し続けたのでした。

人間的魅力に溢れ、ロマンと不屈の闘志を持った、リーダー三木稔。私は、彼の心友であったことを誇りに思います。

「三木稔さんを悼む」

田村拓男（日本音楽集団代表）

1963 年頃、西洋音楽志向であった私は、三木さんが書き始めた「古代舞曲によるパラフレーズ」の前奏曲に出会い、その才能と意気に感じて新しい日本音楽創造活動をともにすることになった。当時 12 音技法の音楽が真っ盛り、前衛作曲家でなければ作曲家に非ずの時代というのに…。伊福部昭の民族派係累の真価が私にも仄見えてくるのだった。以降、洋楽・邦楽界を向うに廻しての戦い？の連続。

三木さんはとどまることなく次々と仲間を創っては突進、新しい世界を開く人。その攻撃的な姿勢は時に内外からの反発も受け決別も。根は寂しがり屋で祭り好き。

’81 年頃には団内で二十絃箏偏重に対する騒動、名曲「コンチェルト・レクイエム」には感涙もしたが、曲誕生の経緯については哀しび（かなしび）もついて回る。
’96 年のオーケストラ･アジア騒動では団分裂の危機も…。二度の退団とは稀有なこと。東西の融合を願って書き上げたシンフォニー＜急の曲＞Symphony for Two Worlds（1981 年）の初演は、東ドイツ（当時）ライプチッヒにおいてゲヴァントハウスオケと日本音楽集団の共演（指揮：クルト･マズア）で実現。三木稔を一躍世界の作曲家に押し上げた。三木さんの予言と期待は 1989 年のベルリンの壁崩壊で実った。

三木さんは私の人生を変え、いろいろ教えてくれた人。大先輩に感謝。

音楽の未来を夢見た国際的音楽人・三木稔

西耕一（音楽評論）

三木稔の功績は500文字では語り尽くせない。現代邦楽の普及と発展は三木無しにはありえなかっただろう。楽団創設・楽器開発・作曲・後進指導は日本音楽集団、オーケストラ・アジア、Aura-J、三木が新箏と総称した20・21絃箏への作曲、演奏・作曲における後進指導を挙げられる。それを国内で留ることなく世界にアピールした。ゲヴァントハウス管200周年委嘱作やアメリカ、イギリスからのオペラ委嘱でも日本の楽器を敢えて使った。師の伊福部昭の仕事にも比肩される『日本楽器法』は和・中・英・三ヶ国語で出版され世界中の作曲家が日本楽器を扱うための地盤を作った。

現代邦楽のみが三木ではない。マリンバ奏者ならば世界中誰もが知るマリンバス・ピリチュアルの公式演奏回数 1 万 5 千回以上、オペラ愛怨の日本語でのドイツレパートリー上演等が物語る。三木音楽は、特定地域や文化に留まらず、欧米文化圏から中国・韓国を含むアジア文化圏までに高く評価され、継続して演奏されている。作曲だけでない総合的プロデュース活動が蒔いた種は 10 年、20 年、あるいは 100 年後に偉大さが証明されるはず。まさに音楽の未来を見据えて活動した真の国際的音楽人であった。

（ここまで五十音順・敬称略）

特別寄稿　三木先生との想い出・・・・！！

声楽　佐藤光政

三木先生・・・数々の素晴しい作品を歌わせて頂き、又、沢山の想い出を残して下さり、本当に、本当にありがとうございました。
数あるそんな想い出の中から、二期会五十周年記念、“春琴抄”フィンランド公演の、懐かしい想い出を・・・。

フィンランドと言う、北欧の国で、すべてを日本語で、しかも殆んどが正座か中腰のまま歌い通す役、それが“佐助”。障害は大きければ大きい程・・・とは言うものの実際、前奏曲を聴きながらスタンばる下手の、その袖の高い事・・・。舞台から三十七段も上にある高所。盲目の春琴の手を引きながら登場する佐助の僕は、その階段を、腰を低く落とし、何と後ろ向きのゲタバキで、その上、ミワコサン（松本美和子氏）の体重をしっかりと右手に受けながら、降りて行かねばならないのではあります。

刻々と、出の近い事を告げるオケのメロディは、そんな僕の緊張感を一層高めてくれる訳でして思わず“どうぞ、どうぞ、どーぞこの階段から二人してコロゲ落ちたりしませんように・・・！！”などと祈る様な次第・・・。だってこの瞬間を迎えるまでには、どれ程多くの人や物、エネルギーの程を考えれば、失敗などは絶対あってはならない事！！そんなプレッシャーがさて、プラスに転ずるか、マイナスに表れるか・・。と、その時僕は唐突に彼女の手をしっかりと握りしめ、今思い返しても冷や汗もののセリフを、本気で言ったものです。『ミワコサン、ニジカンダケデイイカラ、ホントニ、ホントニボクノコイビトニナッテクダサイ！！』。その時、彼女の握り返して来た手の強さは、まさにその場に恋の確かな炎を燃やしてくれたのではありマス！！“そう、これは恋の道行き、命をかけて旅立つ、哀しくも甘やかな道中・・・！！”

出の合図が近づき、切羽詰まったそんな時、ふっと今までのプレッシャーが、切ない程の恋の思いに変わり、“命をかけて春琴を・・・”とばかり三十七段の高所から、遥か彼方の舞台まで、何ともきっぱりと、いそいそと、晴れがましい道行きを始めていたのではありました。その後は・・・？
一度ノッテしまえばもう、こっちのものデス！！

その翌日、現地の新聞評は、嬉しい大絶賛！！三木先生と歩く道すがら、何度“サスケ、サスケ”と声をかけられた事か・・・。そしてあの時の先生の笑顔、温かくやさしい笑顔は、今も僕の心の中に残って居ります。

本当に、本当にありがとうございました。

（さとう・みつまさ／本会声楽部会会員）

林光君のこと、別宮貞雄さんのこと。

作曲　助川 敏弥

昨年暮から、訃報が相次いだ。三木稔さん、林光君、そして別宮貞雄さん。三木さんについては、前号に書かれたから林君と別宮さんのことを書く。

林君の専門の作曲の業績については紹介報道されているし、多くの人には周知のことである。専門の評論を見ればよい。ここでは身近な者だけが知る彼について書く。

私が林光君を初めて見かけたのは昭和 25 年の春、札幌から上京直後のことであった。昔の内幸町の NHK のスタジオで東響、当時は東宝響が、上田仁さんの指揮で、プロコフィエフの第五交響曲を録音していた。この曲にはピアノが入っている。このピアノを目がさめるような明快さでひいている少年がいた。これが林光君であった。　彼はまだ慶応の高等部三年にいたはずである。翌年のこと、有楽座で、ストラヴィンスキーの「ペトルーシュカ」の舞台初公演があった。小牧バレエ団、グルリット、東響であった。この曲はピアノが協奏曲のように活躍する。このピアノも林君であった。このとき彼は芸大一年生であった。この頃まだ、私は彼と面識にはいたらなかった。翌年、私が芸大に入学すると、同じ池内友次郎先生の門下となった。この頃から交友が出来た。

彼の秀才ぶりについて書いておこう。

芸大作曲科の期末試験は途方もなく難しい。各教室ごとに分かれて実施されるが、私たちの教室は、池内先生の方式で、パリ音楽院の方式だった。午前 10 時から午後 4 時まで六時間。その間何をしてもよい。試験官も居なくなる。他人と似ることはすぐ分るからカンニングはそもそも不可能である。だから監督官も必要ない。教室から出ることも自由だし、コーヒーを飲みの行ってもよいし、他人と相談してもよい。

四声の和声の課題を実施するのだが、弦楽四重奏曲のように成熟した仕上げ方をしなければならない。はじめのうちは数人ずつ集まって雑談などしているが、その内、各人、机の問題をにらみながら沈黙の時に入る。他人と相談する者もいる。林光は私の隣の席にいた。彼は一時間くらいたつと、問題をにらみ始めた。普通は、書いたり消したり、苦心しながらとりくむのだが、林はまったく鉛筆を走らせない。ひたすら紙を見つめている。当時は暖房も不充分で、オーバーを着たままで、両腕を組んで、たもとに入れるように袖に入れた姿勢だった。

そうした沈黙と緊張の空気が続く中、いよいよあと一時間くらいという時、林はゆっくり答案を書き始めた。私たちは鉛筆と消しゴムの粉とにまみれていた。しかし林は一度も消しゴムを使わなかった。やがてまだ時間があるのに答案を提出して部屋から出て行った。　数日後、期末試験が終り、池内先生から講評があった。林の答案が一番の出来だった。

まだある。私たちの同期に篠原真という男がいた。これもたいへんな才能の男で、古今のピアノ曲をすべて暗記でひく。山本直純もたいへんな才能だったが、その直純が不思議がっていた。記憶力が抜群の人間というのはありうるが、篠原がひく技術の方も覚えているのが不思議だと。その篠原が、林に感心していた。軽井沢で他流試合のようなことをしたそうだ。あるテーマを出しあってそれを展開してゆくのだが、林は、そのテーマに対旋律を入れてフーガを始めたそうだ。それは篠原にも出来なかったと言っていた。

林光君は社会政治にもただならぬ旺盛な意識を持っていた。彼は反体制者ではあるが、現実社会の左翼には冷淡だった。あまりにも観念的固定的で、左翼政党自体が官僚化しているからである。新左翼ということになろうが、現実の新左翼も愚かで関心なかった。東西冷戦のさなか、アメリカもソ連も嫌いということになった。1950 年代のこと、ある雑誌がアンケートを行なった。「50 年後の世界はどうなっているか」という質問だった。林も回答者にいた。彼は、「アメリカに初の黒人大統領が現われる」と書いた。これは現実に当ったのである。多くの新聞雑誌にあまた論説を書き続け、政治社会評論家としても一家をなしていた。

私が彼を恩人とするのは、誠心誠意私のデビューを助けてくれたからである。作曲家の会「山羊の会」は、間宮芳生さん、外山雄三さんと林君で発足したが、私が芸大を出るとすぐに四人目の仲間として迎えてくれた。そして、私のデビューのための演奏会も開いてくれた。このときの友情は現在の私の人生を可能にしてくれたし、なによりも私は、人の、善意、友情というものを信ずる人間になることが出来た。人としてかけがえのないものを与えてくれた朋友である。無限の感謝をこめて瞑目する。

別宮貞雄さんは私たちより９歳くらい年長の大先輩である。別宮さんについても、作品実績はしかるべき資料を見ればよいから、そうでないことを書く。別宮さんは信念の人だった。いまから半世紀くらい前、作曲の世界は自称「前衛派」の勢力が盛んで、マスコミ、評論もこれに組し、新しくないものは価値なきものという粗暴な空気に満ちていた。その中で別宮さんは、音楽の価値は新しいことではない、という信念を貫いた。いまの政治の世界でよく言われる「ブレない人」だったのである。

自称「前衛派」の別宮さん攻撃はすさまじいものだった。礼儀すら失っているものもあった。別宮さんも信念が固いとはいいながら、ずいぶんと不愉快さに耐えていたようだ。自称「前衛派」から見れば、保守派の巨頭ということだったろう。

「現音」の委員長を長くつとめたが、それでも、論敵の意見を頭からしりぞけることはしなかった。話を聞きながら「そうか、そうか、」と聞いていた。いまとなっては、別宮さんは、音楽に限らず、人はいかに生きるべきかという不動の範例を示してくれた。ある時、「現音」では、自称「前衛派」が憤懣やることなく、あわや分裂か、という臨時総会が開かれた。総会に先立つ委員会で、激しい論争の中で、ある年配の「前衛」派の先生が激しい口調で言った。「そもそも『現音』は新しい音楽を推進するために結成されたのだ!」と。すかさず別宮さんが「質問あります!」と手あげた。「新しいとはどういうことですか?!」。見事な反論である。相手はぶつぶつ言いながら沈黙した。人は節を曲げてはいけない。人生の生き方を別宮さんは身をもって教えてくれた。

（すけがわ・としや　本会代表理事）

信念の人、別宮貞雄さんを偲んで

作曲：中島 洋一

私が初めて別宮貞雄の名前を知ったのは、中学生か高校生の頃、ラジオ放送で『日本組曲』を聴いた時だった。音楽大学に入学してからも時折別宮さんの作品は耳にしたものの、面識はなかった。

はじめて、お会いしたのは、私の恩師高田三郎先生を囲む会に別宮さんがゲストとして招かれ、一緒に会食した時だった思う。別宮さんの高校時代の音楽の先生が高田三郎氏で、そういう縁もあってか、日本現代音楽協会では高田三郎氏が委員長、自分が書記長を務めることになったというようなことを楽しそうに話されていた。

その後、私も現音に入会し、総会や終了後の打ち上げでご一緒することがあった。私が電子音楽をやっていると話すと、「中島さんが電子音楽をやるのも悪くないけど、それにしても音大生の数学や物理の学力はひどいものだねえ。ピタゴラスの定理、そんなものがあったかしら、サイン、コサイン、どこかで聞いたような気がするって言うんだよ」と、例の大きく甲高い声で話されていた。

10 年近く前だろうか、私が自家製の CD『電子音楽作品集』をお贈りしたことがあり、丁寧なご返事はいただいたのだが、私の『レクイエム』という作品について、ミソクソに評価されていた。音楽評論家の故富樫康氏が手紙で好意的な感想を寄せてくれたのとは対照的であった。

いつぞや、別宮さんが『音楽の世界』で、インターネットは悪しき商業主義に犯されており、そこでは『悪貨は良貨を駆逐する』と批判的な記事を書かれたことがあったが、新年会の席で、その話題を巡って別宮さんと論争したことがある。私は、インターネットは悪しき商業主義に犯される危険性がある反面、良質な情報を低コストで流せる利点もあると反論した。お互いの意見は平行線で咬み合わなかったが、別宮さんは「貴男はしっかりとした考えを持っているからいい」と、その時は褒めて下さった。

また、別宮さんは面倒がらずに、後輩の作品などもこまめに聴きに来て下さる方だった。2005 年 1 月に私が芸術劇場で音舞劇『火の鳥』の公演をした際にも、聴きにきて下さった。その後、決して自信作ではなかったので、「未熟な作品にお付き合いさせてすみません」と言ったら、何も言わずに、にっこり微笑んでいらっしゃった。

三年前の 2008 年 12 月にエレクトンシティで、野口剛夫氏の指揮で詩歌劇『井筒の女』を上演した後、記念写真を撮るため、別宮さんにステージに移動していただいたが、肩をお貸ししないと席から立ち上がれず、やはりお年を召されたな、と感じた。

別宮さんは「音楽は旋律線、和声などしっかりした構造性を持っていなければならない。音色や響に溺れるような作風は邪道である」という揺るぎない価値基準を持っておられた。人間の叫び声や、呻き声を表現素材として使っている私の「レクイエム」など、認めてくれる筈はなかった。しかし。別宮さんのように頑固に自分の価値観を貫き、はっきりとものを言う作曲家がもういなくなった。別宮さんの逝去は、寂しく、そして残念でならない。

（なかじま・よういち　本誌　編集長）

福島日記（7）

作曲　小西 徹郎

時の流れは早いものであと１ヶ月で２年生たちは卒業していく。この一年、震災後に勤務し始めた国際アート＆デザイン専門学校、私は試行錯誤しながら何が学生にとって大切なのか？そのことばかりを考え続けてきた。授業では生き抜いていくための術、そして理論の実践、音楽の外側とどう向き合うか？そのようなことを中心に講義を進めてきた。ところが、私の講義している内容を学生たちだけの力ではなかなか船を漕ぎ出すことができない、そんな状態の中私は良い策はないだろうか？と考えてきた。

後期になって講義の時間、枠が増えてより学生との接点が増えて一年生を中心ではあるが共に制作したり彼らの作品に演奏で参加したりするようになった。その中で気がついたことは、単に理論を実践する、音楽の外側を語る、社会の中の音楽を考える、このことだけでなく彼らを自身の仕事や制作に参加させる、そのことによって私自身も勉強になるだろうし、彼らには参加したことが実績としてついてくる。だったら小西徹郎の名義以外で新たにプロジェクトを立ち上げよう！と思い立ち行動に移したのが「T-Project」であった。昨年の１２月の半ばであった。２年生が卒業する直前ではあるが急ぎ足であっても行動に移してよかったと思っている。

２年生の小川広樹君がもういよいよ年度末の授業最終日になって「小西先生、音源を聴けるようにしました、ぜひ聴いてください！」と申し出てきた。私はすぐに彼の音源がアップロードされているサイトに行って音源を試聴した。ハードロックを好む彼のギターはフィンガリングの美しさが目に浮かぶような聡明なフレーズを奏でていてその演奏から彼に「T-Project」に参加してもらうように伝えた。小川君はとても音楽に対して真剣に取り組んでおり、常に謙虚でひたむきに練習し制作するその姿勢は誠に素晴らしいものであり、音楽をやっていく、いや、ひとつの人生を生きていくこと、その準備ができていると感じた。

小川広樹さん

小川君の音楽を聴いて私はある人を思い浮かべた、それは日本を代表するロックバンド「BOW WOW」のスーパースターロックギタリストの山本恭司氏。私は恐れを知らずに山本恭司氏にメッセージを送った。小川君の音楽を聴いて頂きお言葉を頂戴したかったのだ。おそらく返事はこないだろうと思っていた時に山本恭司氏からメッセージが届き、お褒めをいただき「作っていて疑問に感じたことはとことん

山本恭司さん

追究していくこと」という内容のお言葉をいただいた。私はこのお言葉に感激してすぐに小川君にメールを送った。小川君は大いに感激しこれからもっと更に磨きをかけてがんばります！と返事がきたのだ。音楽を創作を続けていく中でとても大切なのは自分自身、そして出会いであると思う。その出会いの中でいただいたお言葉は大きな心の糧となり人生を支えていくものになる。私自身もそうだったし、小川君もきっとそうだと思うのだ。山本恭司様の心温まるお言葉、その宝物のお言葉のプレゼントに本当に感謝の気持ちでいっぱいです、ありがとうございます。

現在「T-Project」は持ち曲が４曲、これから増やしていく予定である、今回はじめてコラボレーションした曲は「MOTTO!!」という楽曲で、この楽曲には同じく国際アート＆デザイン専門学校の２年生の石川桃菜さんもボイスで参加してくれた。この曲はとてもビートが効いていてどちらかというとパッションの激しい音楽であるがそんな中彼女がきかせてくれた歌声はまさに天使の歌声であり楽曲の激しさをやさしくさましてくれるようであった。今後もまた福島の学生や福島で活動しているミュージシャンに少しずつ声をかけながら地道にコツコツと活動を進めていく予定である。そして彼らの中で何かのきっかけにしてもらえたらうれしい。

石川桃菜さん

もうまもなく卒業してしまう２年生、この一年考え続けてきて最後の最後で思い立ったこのプロジェクト、もっともっと早くてもよかったのかもしれない、だがせっかく始めたこのプロジェクト、２年生が卒業しても社会に出て行っても変わらず続けて共に作っていきたい、また福島の若者、福島で地道に活動しているミュージシャンにはぜひ参加してほしいし共に進んでいける仲間としてこれからもかかわりを深めていき広げていきたい、そのように思っている。そして来月卒業する２年生に伝えたいこと、それは常に可能性はある、だから音楽に限らず生きていくことにおいてあきらめることなく常に可能性を見つけながらたくましく社会人として音楽人として生きていってほしいと願っている。

（こにし・てつろう　作曲会員）

《明日の歌を》— 楽友邂逅点ガクユウカイコウテン —

橘川 琢

第六回 今井重幸 舞踊に魅せられた作曲家が育てた、異色の舞踊家列伝(2)

情勢厳しい「今」のただ中で日々模索する音楽人・芸術家。自ら信じる《明日の歌》を奏でながら発し続ける「現場」の声・その後ろ姿は、ともに旅する友のエールに似ている。

六回目は、作曲家「今井重幸」として、現代舞台芸術の企画演出者「まんじ敏幸」として、長く舞台・舞踊界に関わってこられた今井重幸氏に、対談形式でお話を伺いたいと思います。

■今井 重幸/まんじ敏幸

（作曲家、指揮者、舞台芸術企画・演出者）

（写真：小島竜生）

1933 年生まれ。1945 年より独学で作曲を初め、交響詩「狂人の幻影」が縁となり、伊福部昭に入門。のち米国でエドガー・ヴァーレーズに師事。1953 年 NHK テレビの開局にともない、影絵・人形劇の制作スタッフとして参加し、「蜘蛛の糸」「杜子春」「走れメロス」などの教養番組音楽を作曲。映画では前田憲二監督、亀井文夫監督、手塚陽監督らの音楽を担当。舞台では東京芸術座、ソシエテ・デザール、青俳、文学座、人間座、薔薇座、アルス・ノーヴァなどの劇団に楽曲を提供。

また、まんじ敏幸の名で舞台演出家としても活動し、1956 年、舞台に関連する若い芸術家たちとともに「現代舞台芸術協会」を設立、企画と演出を担当。ヨネヤマ・ママコ（ダンス・マイム）、土方巽（舞踏---今井は土方の芸名の命名者であり、「舞踏」のジャンル名も今井による）、三条万里子（モダンダンス）、小松原庸子（スペイン舞踊）、長嶺ヤス子（フラメンコ舞踊）らを世に送り出す。

現代舞台芸術協会理事長、日本フラメンコ協会理事、東京造形大学造形学部・舞台芸術専攻元講師、日本大学生産工学部・建築工学科元講師。

■橘川 琢（作曲家・日本音楽舞踊会議理事）

作曲を三木稔、助川敏弥の各氏ほかに師事。文部科学省音楽療法専門士。文化庁「本物の舞台芸術体験事業」に自作を含む《羽衣》(Aura-J)が採択される。『新感覚抒情派(「音楽現代」誌)』と評される抒情豊かな旋律と日本旋法から派生した色彩感ある和声・音響をもとにした現代クラシック音楽、現代邦楽作品を作曲。現在、諸芸術との共作を通じ、美の可能性と音楽の界面の多様性、さらに音楽の存在価を追究している。

■ヨネヤマ・ママコとの出会い

――今回は、日本におけるパントマイムの草分け的存在として知られるヨネヤマ・ママコ(1935 年―)さんを発見された辺りのお話から・・・

「ママコが踊りを始めたのは、そもそもお父さんが戦前、東京にいた時、石井漠（1886-1962）に習っていた直接の影響から始まるんです。そしてママコも舞踊を志望し東京教育大学（今の筑波大学）の体育学部に入学しました。当時日本では、そこにただ一つ舞踊専攻があったようです。そこへドイツで勉強して帰って来た江口隆哉（1900-1977）さんが先生として呼ばれたんですね。学校

で江口さんについて学んでいたけれど、それだけでは物足りなくなって、江口・宮舞踊研究所にも通うようになり、卒業後も研究生として残った。そこでは大変評価されて。そこに二瓶博子さんという、江口・宮門下の最古参だった人がいたんだけれど、群舞の一人として、その二瓶さん第一回リサイタルにお手伝いに行くことになった。」

──ええ。

「二瓶さんは長く門下をしていたので、江口さんに歓迎されて独立することになった。二瓶さんも初めて稽古場を持ったので、弟子も若く、舞台に載せるほどのお弟子さんがまだいなかったから江口・宮さんのところから群舞としてお弟子さんを借りて来た。それで、二瓶さんの後輩に当たるお弟子さんを十何人、協力出演したんです。その中にヨネヤマ・ママコがいた。
　ぼくはこの時の作品、ダンス・トリプティーク『バクテリー（細菌）(1952 年)』を委嘱されて音楽を書いた。作曲に約半年ほど時間をかけて、三部作を作った。」

──細菌がテーマ・・・ずいぶん斬新で面白いテーマですね。

「二瓶さんのお兄さんが細菌学の学者さんで、そこから二瓶さんがヒントを得たんだね。舞踊作品だけど、何がどうしたというストーリーが一切無い、菌の作用や活動の中から三種類を模した動きの作品。当時では斬新な作品でした。
　作曲が終わったら二瓶さんも半年くらいかけて稽古をして。その時に頼まれてぼくも何度もアドバイスのために、月に二三回通って。足繁く何度か通っているうちに、群舞を含め踊り手たちみんなとも仲良くなっていったんです。」

──なるほど。それだけ通って一緒に稽古にいらっしゃれば、ダンサーや群舞の人たちともずいぶん仲良くなられたのでは？

「ええ、さらに半年も通っていたら群舞の人たちの個性もわかり、あの子達はこちらに持って来た方がいいんじゃないのかといったアドバイスをして、それに二瓶さんが応えて・・・。その中で、一番若手で、面白い動きをする、センスを感じた子が、当時、東京教育大学体育学部一年のママコだった。」

■作曲家、舞踊家を育てる・・・ヨネヤマ・ママコの場合

　「ぼくも、通っているうちに相当観察していたし、あの子はこれから絶対のびるよと、二瓶さんも同意見で意気投合していた。稽古が終わったとき、ママコを含めて喫茶店でお茶を飲んでいるときに、『あなたはセンスが良いんだから、本気で踊りをやりなさい』『本気でやりなさい。ほんとのプロになる意識でやりなさい』と激励した。
　そうしたら喜んで、これからの踊りの話を聞かせて下さいと、これからどのような舞踊の世界に行ったら良いのですかとぼくのところに電話までかかって来て。」

──なるほど。

「ぼくは、『君は今は研究生だから、まず群舞の中で肉体の稽古は皆と一緒にしなさい。その中で自分のキャラクターや個性が一番生きる世界なんだから、自分の個性をみがきなさい。持っていな

いものを自分で探し出す努力をしなさい。』と教えたんです。そのうち阿佐ヶ谷のぼくのところへ、アドバイスを求めて通って来るようになって。その頃舞台の若手スタッフを集めて阿佐ヶ谷で『現代舞台芸術協会』というのを計画していた時だから、貴方も入りなさい、ぼくが貴方の踊りを全部面倒見るから、と。系列や派閥に属さない、独自な生き方をしなさいよと。

　そのうち独立心が燃え上がるようになってきたんだろうね。江口さんのところに行っているけど、こういう新しい方向で独立したいという話に。」

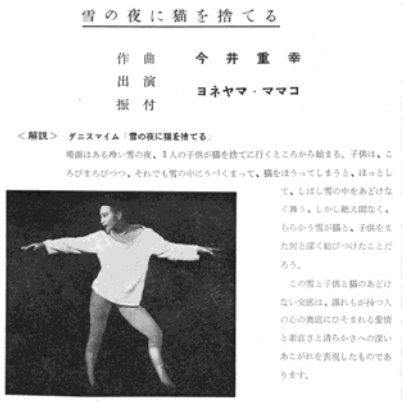
――自分の個性やテーマの発見ですか。それについてはどのようなアドバイスを？

「ちょうどタイミングが良かったんでしょうね。戦後、外国映画で一番ヒットした『**天井桟敷の人々**』(1945 年作品/1952 年日本公開)というフランス映画があって、そこに出演していたジャン＝ルイ・バロー（1910-1994）がその中のシーンでパントマイムをやるんですよ。だから、パントマイムの動きを研究しなさいと。あれを見て参考にしなさい。パントマイムの要素をとりいれたダンスで勝負しなさい。『ダンス・マイム』という新しいジャンル名称を与えるからその方向で徹しなさいと。

　そして、その方向に突き進んでいるうちに、少しあとに、フランスのマルセル・マルソー（1923-2007）が日本公演に来たので、がっちり見て吸収しなさい、と、具体的に見えるものを見させた。こうしているうちにすっかり自分のマイムを見つけるようになった。」

――そうでしたか。「ダンス・マイム」、モダンダンスとパントマイムの融合ですか。しかし、そもそもなぜパントマイムが、ヨネヤマ・ママコさんに合うとお考えになったのですか？

「モダンダンスといっても、みんな最初は同じ練習から入るんだけれど、ママコはその頃からひと味違うものを感じていた。動きがしなやかで、柔軟だった。そして表現力が素晴らしかった。そこで、全部の意味を体で表現するマイムが浮かんで。ダンスというと、意味とは関係なく、ピルエット（回転）、ジャンプの動きを見せることが中心となって来るからね。あなたの場合は、そこで留まらず自分の個性を、全身で意味を持つ表現を持ってつかみなさい。ということでマイムというテーマを与えた。それが一つの形として実ったのが、ママコの処女作にして出世作の『雪の夜に猫を捨てる（1957 年）』です。」


雪の夜に猫を捨てる

作曲　今井重幸
出演
振付　ヨネヤマ・ママコ

＜解説＞　ダンスマイム「雪の夜に猫を捨てる」

場面はある冷い雪の夜、1人の子供が猫を捨てに行くところから始まる。子供は、ころびまろびつつ、それでも雪の中にうづくまって、猫をほうってしまうと、ほっとして、しばし雪の中をあどけなく舞う。しかし絶え間なく、ちらちら雪が猫と、子供をまた何と深く結びつけたことだろう。

この雪と子供と猫のあどけない交感は、誰れもが持つ人の心の奥底にひそまれる愛情と素直さと清らかさへの深いあこがれを表現したものであります。

『雪の夜に猫を捨てる』プログラム

――作品リストによりますと、振り付け、美術、出演、全部ヨネヤマ・ママコさんがされていますね・・・。アイデアや振り付けなどに関して、具体的にはどんなアドバイスを？

「その頃、自分に似合ったテーマを探しなさい、と話したら、『猫』が好きだと。猫の生態、動作は動きの勉強になるから、よく勉強して観察しなさいと教え、研究する事になって。研究の後に、じゃあ自分で作品を考えてみなさいと。さらにぼくが音楽を書いて、振りのアドバイスを。
結果的には『雪の夜に猫を捨てる』は周りからも高く評価されて、新人公演にも出ました。」

■音楽の視点から・・・作曲と振り付けと

──なるほど。音楽面からですが、ダンス・マイムを指向されたヨネヤマ・ママコさんに音楽を書くときに意識された事は？音楽との関係について、意識の仕方などの話は？

「やはりママコを活かすために、音楽を書きました。マイムを中心としたダンス音楽を。純粋音楽とは違う指向の音楽を書いている。テーマやストーリー等に沿って。だから、頼まれる音楽に関しては型を決めず、一つ一つ作品に合った違う音楽を書く。この場合は、割にソフトに音楽を書いたんです。こういう音楽は、相手に合わせなきゃね。だからこれは純粋にママコの動きを、ママコの個性を生かすために、ママコを育てるという立場で書きました。ファゴットやチェレスタ、パーカッションなどを使って・・・。

ダンスと音楽との連動については、育てている段階で教えました。毎日稽古して、彼女の方向付けをしつつ。ぼくの曲以外でも、バルトークなどを聴かせて、これに振り付けて見なさい、と。ほかにもシェーンベルクの『月に憑かれたピエロ』やストラヴィンスキー『春の祭典』とか・・・。

その上で振り付けをさせるけど、音楽がこうなっているから、こういう振りをつけて、と具体的に全面指導した。稽古の方法も振りの付け方も、個性やストーリーを見ながら・・・。」

■巣立ち・・・その後のヨネヤマ・ママコ

──その後、のちのモダンダンス界の牽引者となる方々が総出演した「第一回　劇団人間座・現代舞台芸術協会合同公演(1958 年)」での大成功で、ヨネヤマ・ママコさんは次の道が拓けたそうで・・・。

「そう、その時ぼくは NHKTV で毎週劇伴をやっていてね。人形劇ドラマ、影絵劇ドラマの作曲の仕事をしていた。それでこの『第一回　劇団人間座・現代舞台芸術協会合同公演』の時に、NHK のプロデューサーを招待していたんだけど、特に『ハンチキキ（1958 年・・・次回「土方巽」の章で詳細）』の舞台を『すごいね、ママコって』と褒めてくれて。『これはテレビ向きだ、ママコでテレビの企画を立てたい』と。丁度、テレビ向けの番組を模索していた時期だったんだね。これもタイミングというものだね。

そこでシェークスピアの『真夏の夜の夢』のパックを主人公にした『私はパック』という連続舞踊劇にしたらどうかと提案して。その企画が実って、主役で出るようになった。それが大ヒットして、NHK の看板番組になった。初めての連続ドラマで、今のテレビ専属タレントのはしりのような存在になった。それから先は、NHK にママコを託して・・・ぼくの手を離れていったんです。」

その後、ヨネヤ・ママコは NHK「私はパック（1958 年）」に２年ほど連続で出演。フジテレビでもクレイジーキャッツの毎週番組「クレイジーキャッツショー」の客演で出るようになる。故岡田真澄氏との契約結婚(1959 年)があった後、アメリカに渡りマイムを指導(1960 年-1972 年)。帰国後日本、さらにフランス(1991 年)にスタジオ・アトリエを構え、現在は「パンカゴ（・・・パントマイム歌語（カゴ）の意でママコの造語）」を確立、展開している。

（参考資料）ヨネヤマ・ママコ著『砂漠にコスモスは咲かない(1977 年　講談社)』・Wikipedia ほか

（於：2012 年 1 月 10 日/1 月 15 日　今井重幸邸にて）

現代音楽見聞記（12）2011年12月

音楽評論　西 耕一

12 月 8 日、三木稔が 81 歳で逝去した。オペラ 9 作、交響作品、打楽器、合唱、日本楽器、アジア楽器・・・。欧米文化圏だけでなく中国・韓国を含むアジア文化圏でも高く評価され、継続して演奏される作品を遺した。音楽の未来を見据えて活動した真の国際人であったと思う。

1 日奈良ゆみソプラノリサイタル。松平頼則没後 10 年。遺作の初演を含む。奈良は未初演の松平曲を数十曲所有しており、ライフワークとして初演するそう。2 日四人組とその仲間たちが木管特集で全曲初演。池辺、西村、新実、金子ら。3 日東京シンフォニエッタ定期は一柳慧特集で震災後の創作として取り組んだ交響曲第 8 番の初演あり情景描写に近い部分もあるが、これが一柳の意見なのだろう。4 日東北大学吹奏楽部の公演を聴くために仙台へ。黛敏郎作・堀井友徳編の東京オリンピックのアマチュア初演、鹿野草平が東北復興へ寄せた、よみがえる大地への前奏曲の初演など。東北大の若々しくも力強い演奏には奮い立たせるものがあった。同日国立音楽大学シンフォニックウインドアンサンブルによる J.ユーのクニタチ・マーチは残念ながら聴けず。5 日は東京ワンダーサイトで中川賢一がメシアンの鳥のカタログを全曲演奏（昼から夜まで）。その間にチェレプニンの孫が三木稔の作曲した盆踊りで踊るインスタレーションなどを聴く。同日野坂操壽二十五絃 20 周年記念リサイタルあり。6 日日本音楽舞踊会議創立 50 周年記念ピアノと室内楽の夕べで助川敏弥曲初演があったが筆者は行けず無念。7 日、畑中良輔・塚田佳男企画の日本歌曲と音の魔術師たちで第 47 回石井歓があったが、筆者は松尾慧の笛と森ミドリのチェレスタによるコンサート「音のゆくへ」。チェレスタのために作曲・演奏を続ける森は池内友次郎、矢代秋雄、佐藤眞に習った才媛。昨今は合唱曲を多く書いている。8 日は三木稔逝去…。

9 日中央大学管弦楽団定期、佐藤寿一指揮で三木稔オーケストラのための舞を再演。筆者は旧奏楽堂で津留崎直樹 vc リサイタル・野平一郎や丹波明曲など。10 日緑の風を支援するチャリティーコンサートで助川敏弥曲初演。80 歳を超えた助川の旺盛な創作は特筆されるべきであろう。この年齢では最も多作な作曲家かもしれない。13 日桐朋学園大学パーカッションの夕べで三善晃の阿含、三木稔のマリンバ・スピリチュアル他。三善の阿含は 12 人の打楽器合奏だが、2 分間に全てを圧縮した打楽器ファンファーレ。苛烈なる音響の渦！15 日はドイツから来日したアンサンブル・アダプターの公演へ鈴木治行、小櫻秀樹の新作など。16 日東京混声合唱団定期でまだ 20 代の松井慶太、伊藤翔の指揮を聴く。委嘱曲も同世代の小出稚子。新世代が育って来ている。17・18 日は東京バレエ団の The Kabuki。ベジャールの振付、黛敏郎の音楽であるが世界中で公演を重ね、幸か不幸か黛では世界で最も知られる曲の一つとなっている。18 日藝大 21 創造の杜で矢崎彦太郎指揮、藝大フィルにて阿部俊祐、折笠敏之、安良岡章夫の新作と山田一雄の交響的木曾再演。19 日北澤恵美子マリンバリサイタルで山本純ノ介、一柳慧の新作委嘱初演。20 日野平一郎リサイタルはポリフォニー再認識。ホリガーのパルティータ日本初演他。同日松平頼曉 80 歳の肖像。21 日 ex. でフルート三重奏のマグナムトリオが清道洋一、田口和行、中川俊郎、山根明季子、川島素晴らの新作初演。山根、川島の充実した創作を味わう。23 日大井浩明が韓国ピアノ・チェンバロ作品を集めた。筆者は行けず。24 日女声合唱団暁にて湯浅譲二、木下正道の委嘱初演。木下が 20 分以上かかる大作で個性光る逸品。これが筆者にとって 2011 年最後の演奏会となった。

（にし・こういち　賛助会員）

日本音楽舞踊会議の出版楽譜のご案内

このコーナーは、本誌裏表紙に掲載されていました、本会から出版された楽譜を隔月で紹介するコーナーです。

前回は、本会会員として在会中にご他界された方の作品として、黒髪芳光作品“ピアノのための四手連弾曲集「こどもの祭りⅡ」（バイエル・メトードローズ併用）及び、小平時之助作品”歌曲集「北の国から」を紹介いたしました。

黒髪作品では、初級クラスで演奏できる内容なので、こども同士・親子の連弾等ご家庭で楽しめる作品であり、先生方には副教材としても活用されると、教える内容も豊かになるでしょう。

小平作品は、東北地方の生活の匂いや人の温もりが肌で感じられる作品で、演奏会で取り上げて頂きたい一押しの作品です。ぜひ歌ってみて下さい。

今回は、２０１０年１０月号から今まで紹介して来ました作品の“総集編”としまして、まとめてご案内いたします。

助川敏弥　作品

「KOMORIUTA」作品73（1986年）

宮城県仙台地方に伝わる子守唄を主題としたピアノ曲。（初級）

A4版9頁　　1,260円

「ピアノ曲集2002」（2002年）

宮城県に伝わる民謡を主題にした作品の「ひえつきぶし」や「Lacrimosa―ちいさき　たましいの　ために」四手連弾「風の遊び」等の作品集。（初級上）

A4版19頁　　1,680円

歌曲集「白く光れり」向山房枝詩（1996年）

向山房枝の短歌集から6作品を選んで作曲された作品集。

A4版17頁　　2,100円

歌曲集「ガラスの花束」立原えりか詩（1976年）

都会的なセンスとメルヘンの世界が作り上げる夢空間―全5曲。

A4版25頁　　2,940円

歌曲集「夕顔」金子みすゞ詩（1990年）

童謡集を歌曲という面から自由に創作の腕をふるっている。―全5曲。

A4版13頁　　1,680円

高橋雅光　作品
おかあさんといっしょに歌う、あたらしい童謡集「どんぐりっこのメロディ」
幼稚園から小学校低学年のこどものために作られた作品。―全12曲。
B5版27頁　　2,100円

中島克磨　作品
ピアノのための詩曲「モスクワ」Poema ”Moskva” for piano**（1990年）**
自己の音楽表現や形式を追求し、自由な筆勢で書かれた作品。（中級）
A4版　8頁　　1,515円

北條直彦　作品
「ピアノのためのヴィジョン」Vision for piano**（1988年）**
コンテンポラリージャズの第一人者が描く心の内面模様。（中級上）
A4版　7頁　　1,260円

金藤　豊　作品
「ピアノのためのトッカータ」Toccata−Interactive for piano
―全4曲（1994年）
日本的な音空間や「禅」にも共通する自由で束縛のない世界観。（中級）
A4版16頁　　1,680円

西山淑子　作品
「金子みすゞの詩による童謡集」―全27曲（1988年）
金子みすゞの思いやりのある心が宝石箱のような曲集に一杯入っています。
A4版80頁　　3,150円

＜本会在会中にご他界された方の作品＞
黒髪芳光　作品
「こどもの祭りⅡ」ピアノのための四手連弾曲集。（初級）
A4版20頁　　2,100円

小平時之助　作品
歌曲集「北の国から」高橋仁詩―全5曲（1976年）
A4版14頁　　1,890円

以上、歌ってみたい！弾いてみたい！心に残る日本の作品、ご案内しました。

＜旧出版楽譜まとめ＞

本誌裏表紙に掲載されている旧出版楽譜（２０１０年以前の出版楽譜）及びこれから新たに楽譜制作を行っていくことについて、今まで停滞していた旧出版楽譜の取り扱いを全面的に見直し、新たに作品の紹介・宣伝の遣り方を整理して、本誌や本会ホームページに改めて公表していくことから始め、それをこれからの出版活動に繋げ活性化していくことが、本会の主旨（音楽家・舞踊家の文化創成の一端を担う）に沿い、宣伝・普及していくことが合わせて会員活動の活性化に繋がり、作曲家の作品成就の援助になるという主旨の基に、楽譜出版活動を推進してきました。

演奏家の方々には、本誌隔月に掲載されている「出版楽譜のご案内」を通じて、本会作曲会員作品への理解に繋がると思いますし、そのためにも、旧出版楽譜については新たに価格についても見直しをして、本会在会中にご他界された作曲家の作品も含めて、取り扱い内容を整理して紹介宣伝をして参りました。しかし、本誌掲載や本会ホームページ等への紹介宣伝は、本会会員特典としてあるので、残念ながら本会で出版された作品でも、途中退会された方の作品は取り上げられませんでした。

これから新たに楽譜制作・出版活動を推進していきますが、旧出版楽譜についても機会あるごとに紹介宣伝活動等を通じ、販売推進をしていきます。

＜新しい楽譜制作・出版活動報告＞

本誌一昨年（２０１０年）１０月号より、旧出版楽譜を隔月でご紹介して来ましたが、その間に新しい楽譜制作について推敲を重ね、昨年（２０１１年）６月より楽譜制作を始め、制作第一号の楽譜が１１月末に完成しました。（出来上がりました楽譜については、本会の作曲家へ「見本」として送付しました。）

新しい楽譜が出来上がるまでには、流通に乗せられるようにＩＳＢＮコード・ＪＡＮメーカーコードを取得し、楽譜紹介・宣伝・販売を推進していくために、出版情報をデーターベースに乗せるよう手配しました。それにより本会から流される出版情報は、日本書籍出版協会データーベースセンターに登録され、オリコン・リサーチ、紀伊国屋書店、Ｇｏｏｇｌｅ、ソケッツ等７社及び取次会社４社へ送信されることになります。同時に発行元として本会の住所・電話番号・ＵＲＬも公開され、本会自体の宣伝にも繋がります。

この手配については本年１月７日に承認の連絡が有り、楽譜制作第一号（試作として制作＝独奏フルートによる哀歌―ＬＡＭＥＮＴＯ―高橋雅光作品）の出版情報を１月１３日に本会から提供しました。

今後本会から出版される楽譜の情報は、随時データーベースセンターへ送信し、宣伝・販売に繋げられるよう推進していきます。

＜これからの楽譜制作と出版に関するお話＞

本年度以降楽譜出版部が理事会承認の上で、どのように楽譜制作と出版を推進していくのかをお話ししましょう。

本会が発行元として制作する楽譜は上記にもお話ししましたように、本会会員特典として制作するものですので、当然のことですが「本会会員であること。」「本会会員中にご他界されたご遺族の方の要望が有った場合。」です。その他の楽譜制作に関する要望は、具体的に理事会で提案が有った場合、話し合いにより承認を得て実施されることになります。

楽譜制作内容については、（１）「作曲者の手書きスコアを本会が印刷して発行する。」（２）「作曲者がご自分でフィナーレ等で作成した楽譜スコアデーターを、本会が印刷して発行する。」（３）「本会が楽譜スコアを制作～印刷迄を行い発行する。」この３点について本会が発行元となり、楽譜出版を行います。

現在のところ楽譜の大きさは、Ａ４版に限定させて頂きます。（将来的には楽譜の大きさについても検討していきます。）

楽譜の縦・横については、一応今のところ「縦」で制作を行っていますが、ご希望についてはご相談ください。

（３）の「本会が楽譜スコアを制作～印刷迄を行い発行する」については、楽譜制作第一号が完成した段階でペース配分が解かりましたので、現在のところ年間３～４作品くらいを目標に、推進していかれればと思います。（１）（２）については随時実施いていきます。

以上のような内容で楽譜制作を推進して参りますが、ご質問等が有りましたら本会楽譜出版部迄御連絡を下さい。

＜楽譜出版部からのお知らせ＞

今まで本コーナーは、隔月に掲載して参りましたが、これからは制作状況に合わせまして、３カ月に一回くらいの割合で掲載・紹介していく所存です。

本会での楽譜制作を含みまして、出版を希望される方がこのところ急激に増えてまいりました。これから希望される方は、なるべく早めにお申し出ください。一旦ご希望を出されると「一刻も早く出版してほしい」と思われる方もいらっしゃいますし、複数の作品を出版希望される方もいらっしゃいます。なるべく御意志に沿うように努力して参りますので、楽譜出版部迄早目の声掛けをお願いします。お申し出を頂いた方には、順に出版楽譜承認証と出版楽譜登録表をお送りいたしますので、記載しだいご返送ください。

本会出版局　楽譜出版部　　高橋雅光

ＣＭＤＪ　会と会員のスケジュール

2012年

２　月

5日(日)小山佳美(ピアノ 青年会員)－　東京セラフィックオーケストラ
第７回定期演奏会　曲：ショパン・ピアノ協奏曲第一番
【杉並公会堂大ホール　14:00開演　1,000円】

７日(火)**定例理事会【会事務所 19:00～】**

11日(土・祭)**日本音楽舞踊会議 第５０期定期総会**
【新宿文化センター会議室　１３時３０分～１６時３０分】

17日(金) 北川暁子　ピアノリサイタル　ベートーヴェンソナタ全曲連続演奏会
第３夜　第4番、第19番、第8番、第31番、第7番
【津田ホール19:00　一般5,000円、　学生3,000円
問い合わせ:サウンドギャラリー 03-3351-4041】

20日(月)**『音楽の世界』編集会議　19:00～　会事務所**

23日(木)深沢亮子ピアノリサイタル　共演：ブリュッセル弦楽四重奏団
モーツァルト:ピアノ弦楽四重奏曲　第1番、第2番、助川敏弥作品、
B.Mernier:弦楽四重奏曲『ハチとラン』
【浜離宮朝日ホール19：00　主催問合せ:新演奏会協会03-3561-5012】

３　月

3日(土) 廣瀬史佳（ピアノ・青年会員）－「チェロ」らしさとは何か
出演：荒庸子（チェリスト）真嶋雄大（音楽評論家）曲：ポッパー「ハンガリア狂詩曲」ほか【新宿住友ビル７階　13:00-14:30　一般4,620円】

７日(水)**定例理事会【会事務所 19:00～】**

９日(金)深沢亮子－室内楽コンサートシューベルト：ます
モーツァルト：ピアノ弦楽四重奏曲第１番【久米美術館18:00
主催・問合せ：日墺協会 03-3468-1244（水・木・金13～16時)】

12日(月)**『動き・舞踊・所作と音楽』コンサート**
【すみだトリフォニー小ホール　18:30開演　一般3,500円】
詳細は裏表紙掲載チラシをご参照下さい。

16日(金) ～東京藝術大学音楽学部北川暁子退任記念コンサート～
ベートーヴェンピアノソナタ全曲連続演奏会 第４夜 第10番　第22番　第29番
【東京藝術大学奏楽堂（大学構内）午後７時開演　入場無料　事前応募制】
お問合せ：東京藝術大学演奏藝術センター　050-5525-2300

17日(土) 福島原発被害者支援チャリティーコンサート
出演:広瀬美紀子／共演：神崎　愛他
演奏曲：ピアソラ作曲／北條直彦編曲 アディオスノニーノ 他
【オリンパスホール八王子（大ホール）14:00～ 2,000円】

23日(金)**『音楽の世界』編集会議　19:00～　会事務所**

25日(日) **エレクトーン・オケによる「コンチェルトと歌曲の調べ」**
【ヤマハ・エレクトーンシティ渋谷　16:00開演　3,000円】
出演者：
小崎幸子（Ｐ）サンサーンス：コンチェルト第２番
笠原たか（Ｓ）ワーグナー：「ヴェーゼンドンクの５つの歌」より

戸引小夜子（Ｐ）ラフマニノフ：コンチェルト第２番
高橋　通（作曲）コンチェルティーノ　第２番
塩川翔子（Ｖｎ）シベリウス・ヴァイオリン協奏曲
山下早苗（Ｐ）ラヴェル　コンチェルト

4　月

７日(土)**定例理事会【会事務所 19:00～】**
10日(火) 深沢亮子　朝日カルチャーセンター　共演：Vn.井上静香さんと
ベートーヴェン ピアノとヴァイオリンの為のソナタ”スプリング”
ブラームス ヴァイオリンとピアノの為のソナタ No.2
【朝日カルチャーセンター13:00　問い合わせ：朝日カルチャーセンター 03-3344-194】
13日(金)**ＣＭＤＪフレッシュコンサート２０１２【すみだトリフォニー小ホール 18:30開演　2,500円 】参加者募集中**
20日(金)北川暁子　ピアノリサイタル　ベートーヴェンソナタ全曲連続演奏会　第５夜　第2番　第20番　第15番　第16番　第30番
【津田ホール19:00　一般5,000円、学生3,000円
問い合わせ:サウンドギャラリー 03-3351-4041】

5　月

７日(月)**定例理事会【会事務所 19:00～】**
10日(木)**作曲部会コンサート【すみだトリフォニー小ホール　詳細未定】**
18日(金)北川暁子　ピアノリサイタル　ベートーヴェンソナタ全曲連続演奏会
第６夜　　第5番　第9番　第14番　第18番　第26番
【津田ホール19:00　一般5,000円、学生3,000円】
問い合わせ:サウンドギャラリー 03-3351-4041

6　月

７日(木)**定例理事会【会事務所 19:00～】**
12日(火) 深沢亮子　朝日カルチャーセンター　共演：Vn. 中村静香さんと
モーツァルト ピアノとヴァイオリンの為のソナタ K.454、ブラームス ヴァイオリンとピアノの為のソナタ No.1【朝日カルチャーセンター13:00　問い合わせ：朝日カルチャーセンター03-3344-1945】
15日(金)北川暁子　ピアノリサイタル　ベートーヴェンソナタ全曲連続演奏会
第７夜　　第6番　第11番　第12番　第24番　第32番
【津田ホール19:00　一般5,000円、 学生3,000円】
問い合わせ:サウンドギャラリー 03-3351-4041
25日(月) 深沢亮子　翔の会　公開レッスン
【トモノホール10:00 問い合わせ：大山喬子 044-966-5224】

7　月

７日(土)**定例理事会【会事務所 19:00～】**
７日(土)**声楽部会コンサート　「歌い継ぐ童謡・愛唱歌コンサート」**
【すみだトリフォニー 小ホール14：00　2,500円　詳細未定】

13日(金)**ピアノ部会コンサート【東京オペラシティリサイタルホール19:00開演　詳細未定】**
29日(日)　深沢亮子　栗栖麻衣子さんとの連弾とソロ【熊谷文化創造館さくらめいと太陽のホール15:00予定　問い合わせ：栗栖 080-3310-4238】

8　月

７日(火)**定例理事会【会事務所 19:00～】**

9　月

７日(金)**定例理事会【会事務所 19:00～】**
８日(土)深沢亮子ピアノリサイタル　共演：ウィーン弦楽トリオ　モーツァルト:ケーゲルシュタットトリオ,シューベルト:ます　他
【浜離宮朝日ホール14：00】
21日(金)**CMDJオペラコンサート2012**
【すみだトリフォニー小ホール　詳細未定】
23日(日)　千葉音楽コンクール本選審査【問い合わせ：千葉音楽コンクール事務局 043-227-0055】

10　月

15日(月)**「様々な音の風景Ⅸ」～２０世紀以降の音楽とその潮流～**
【すみだトリフォニー小ホール】詳細未定

11　月

18日(日)**若い翼によるＣＭＤＪコンサート５（詳細未定）**

12　月

4日(火)　**深沢亮子とその仲間による“ピアノと室内楽の夕べ”**
【音楽の友ホール・詳細未定】

2013年

1　月

25日(金)**声楽部会コンサート【すみだトリフォニー小ホール・詳細未定】**

会員・賛助会員の皆様へお知らせとお願い

○上記スケジュール記載の本会主催事業（ゴシック文字）には、会員・賛助会員・CMDJ友の会の方は会員証呈示で無料、または会員割引料金でご入場頂けます。
○毎号掲載されるこの欄に皆様の活動予定を無料掲載させて頂きます。演奏会に限らず、出版、講演等も「音楽の世界・会と会員のスケジュール欄掲載希望」として日本音楽舞踊会議事務所までメールまたはFaxでお知らせ下さい。
○お知らせの際は、①○月○日（曜日）②会員名　③催し物(出版物)名④メインプログラム一曲、もしくはメイン公演・講演内容を一つ　⑤【開催場所、開演時間、チケット価格、等】の順番でお書きください。

編集後記

昨年 12 月から、本年 1 月にかけての僅か一ヶ月の間に、三木稔さん、林光さん、別宮貞雄さんなど戦後の音楽界を牽引された大先輩の作曲家諸氏が相次いでお亡くなりになりました。真に、悲しく寂しい限りです。亡くなられた方々の殆どが、本会および会員諸氏にとって身近な方々だったので、その方々を悼み追想する記事を 10 ページ掲載しました。その代わり『時評』はお休みしました。しかし、亡くなられた方の追悼記事掲載も、今を生きるこの雑誌の使命の一つと考えます。また、特集：『闇の世界と芸術』においては、最近：特別指名手配犯が自首したことで、人々の記憶を蘇らせた、あの忌まわしい事件にも触れています。本会は、２月 11 日の総会を経て、新体制のもと気持ちを新たにして新しい第一歩を踏み出します。悲しいことや辛いことがあっても、明るく楽しいことも、これから沢山訪れると信じて、頑張って行こうではありませんか。　　（編集長：中島洋一）

本誌は次のところでお取り次ぎしています

北海道	ヤマハ・ミュージック札幌店	011-512-1726
福　島	福島大学生協	024-548-0091
千　葉	紀伊国屋書店千葉営業所	043-296-0188
東　京	オリオン書房外商部	042-529-2311
	㈱紀伊國屋書店　和雑誌ｱｸｾｽｾﾝﾀｰ	03-3354-0131
	アカデミア・ミュージック㈱	03-3813-6751
	全国学生生協連合会図書サービス	03-3382-3891
	早稲田大学生協ブックセンター	03-3202-3236
神奈川	昭和音楽大学購買店	046-245-8100
静　岡	吉見書店	054-252-0157
愛　知	正文館書店外商部	052-931-9321
	マコト書店	052-501-0063
大　阪	㈱ﾔﾏﾊﾐｭｰｼﾞｯｸ大阪心斎橋店	06-211-8331
	ユーゴー書店	06-623-2341
兵　庫	㈱ジュンク堂書店　外商部	078-262-7794
京　都	龍谷大学生協書籍部	075-642-0103
沖　縄	沖縄教販(株)	098-868-4170

編集長　：中島洋一　副編集長 ： 橘川 琢
編集部員：新井知子　浦 富美　大久保靖子　栗栖麻衣子　高島和義　高橋 通 高橋雅光
戸引小夜子　北條直彦　湯浅玲子

音楽の世界 2 月号(通巻 536 号)
2012 年 2 月 1 日発行　　定価 500 円(本体 476 円)
発行人：芙二　三枝子
編集・発行所　日本音楽舞踊会議　The CONFERENCE of MUSIC and DANCE JAPAN
〒169－0075 東京都新宿区高田馬場 4－1－6　寿美ビル 305　Tel/Fax:(03)3369 7496
HP：http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/　E-mail：onbukai@mua.biglobe.ne.jp
A/D：音楽の世界編集部 Tel: (03)3369 7496　印刷：イゲタ印刷㈱ Tel: (04)7185 0471
購読料　年間：5000 円　(6 ヶ月：2500 円)　振替 00110－4－65140（日本音楽舞踊会議）

＊日本音楽舞踊会議会員会費の中に、購読料が含まれております
＊乱丁、落丁がございましたらお取替えします